

42058

教科書文庫

4
810
41-1933
20000 40723

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

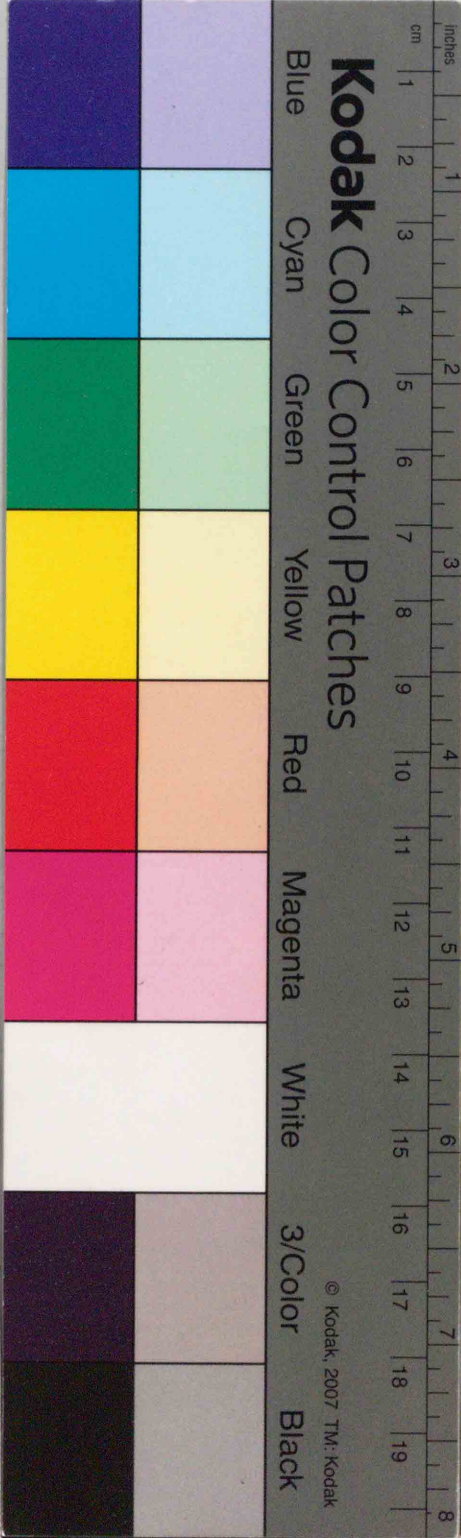


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

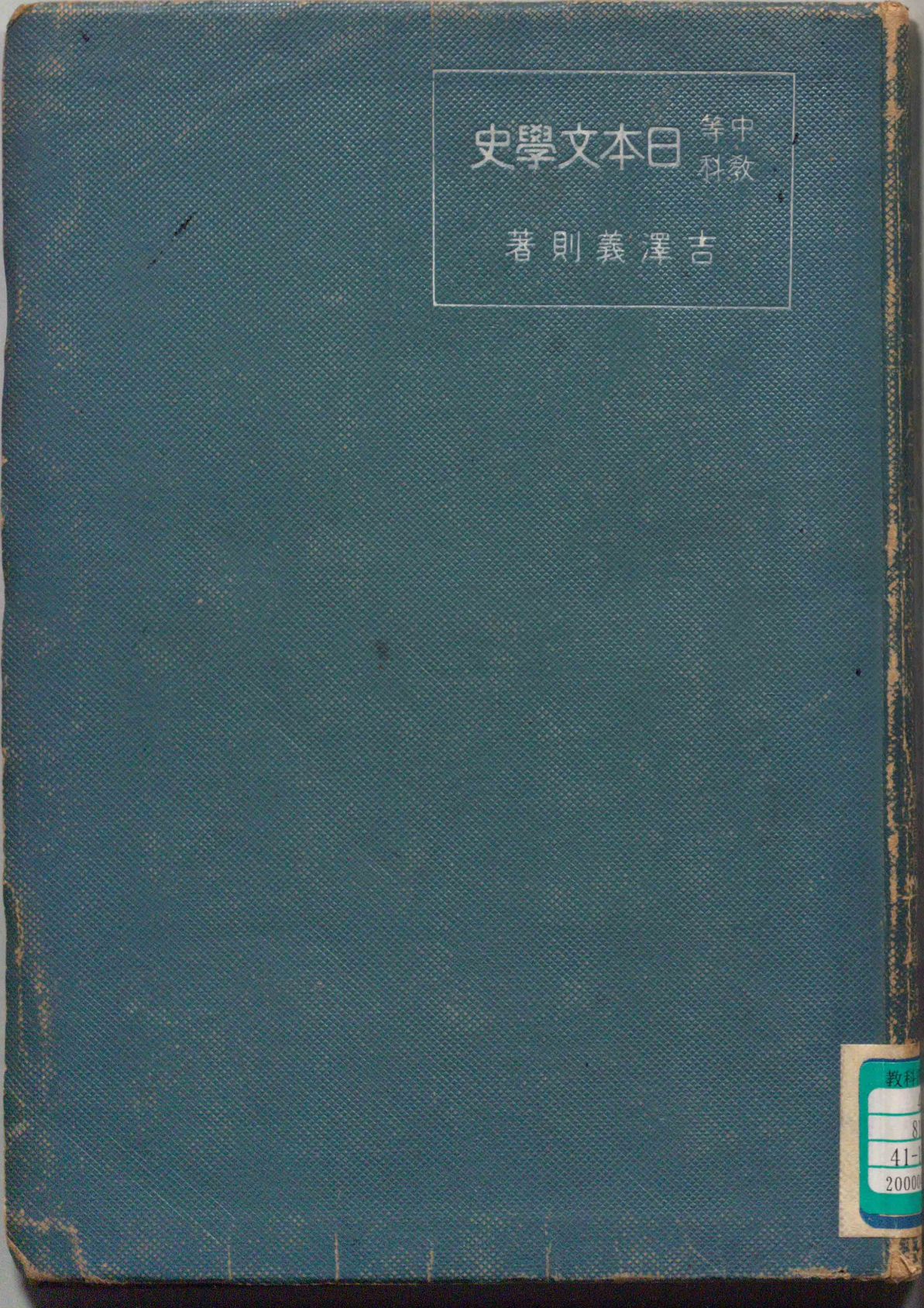
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



中學教科  
**日本文史學**  
 吉澤義則著

教科  
 8  
 41-  
 20000



資

教科書文庫  
4  
810  
41-1933  
2000040723



325.9  
Y019

375.9  
1019

中等  
教科 日本文學史

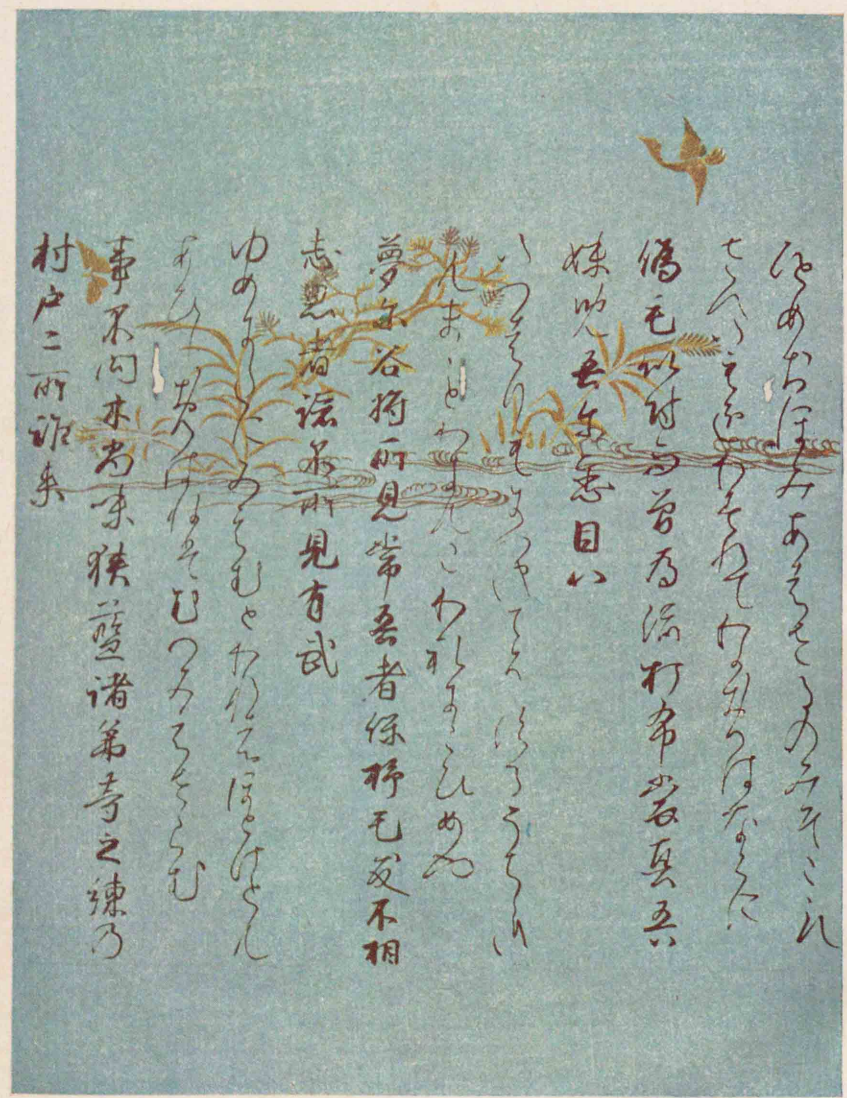
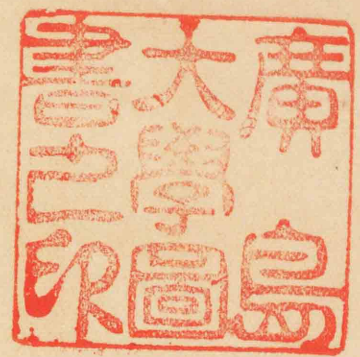
昭和八年三月二十日  
文部省檢定濟

師範學校國語漢文科用  
中學校國語漢文科用

星野書店發行

広島大学図書  
2000040723  


375.9  
1019



此のうらほふあそこのみそん  
てんいそむをわてわらうはな  
備毛以討る曾乃流打希必右兵五  
妹也五年志目い  
いそむをわてわらうはな  
夢尔谷将所見常吾者係行毛及不相  
志思清法弟所見有武  
ゆめよりあそこのみそん  
あそこのみそん  
事不同本為末狭薩諸弟寺之練乃  
村戸二所印来

集葉萬本桂

桂本萬葉集（御物）

萬葉集を書寫したもので現存のうちの最古のもので平安朝中期の書寫と認められてゐる。

筆者は紀貫之又は源順と傳へられてゐるがまた何人の筆とも決し難い。

寫眞は、卷第四「ひとめおほみ云々」の所以下である。

例言

一、本書は師範學校中學校の教科書として編述したものであります。

一、上古より近世に至るまでは、その概觀を述べるに止めて、適切な文例を示すのを主としました。これは教授者活動の餘地を豊かにしたいと考へたからであります。

一、明治以後は從來現代としてまとめられてゐましたが明治初年以來既に六十餘年を過ぎた今日からは、これを近代といふ語で表はした方が穩當と考へ、明治大正を合して近代としました。

一、尙現代の文學は近代の文學を述べる際、略述しておきました。これはその方が學習に便利であると考へたからであります。

一、近代の文學は小説、短歌、俳句、詩に分類してやゝ詳述し、文例は短

い歌俳以外は省略しました。近代文學は自然目に觸れることも多く、既に學習したのも少くない事であるし、かたゞ時間數を考慮した結果であります。

昭和七年九月

著者 識

中等  
教科  
日本文學史

目次

第一章 序説	一
第二章 上古の文學	五
第一節 古事記	七
第二節 祝詞	二
第三節 宣命	四
第四節 萬葉集	六
第三章 中古の文學	六
第一節 古今和歌集	六
第二節 竹取物語	三
第三節 伊勢物語	四

第四節 土佐日記……………三七

第五節 源氏物語……………四一

第六節 枕冊子……………四五

第七節 大鏡……………四九

第八節 榮華物語……………五三

第四章 近古の文學……………五七

第一節 新古今和歌集……………六〇

第二節 平家物語……………六六

第三節 源平盛衰記……………七三

第四節 太平記……………七六

第五節 増鏡……………八〇

第六節 方丈記……………八五

第七節 徒然草……………九〇

23

第八節 謠曲……………九四

第九節 狂言……………一〇一

第五章 近世の文學……………一〇七

上 上方文學の時代……………一〇九

第一節 松尾芭蕉……………一一六

第二節 俳句抄(上)……………一二八

第三節 井原西鶴……………一二二

第四節 近松門左衛門……………一二六

下 江戸文學の時代……………一三〇

第一節 俳句抄(下)……………一三三

第二節 横井也有……………一三五

第三節 狂歌川柳……………一三六

第四節 近世の短歌……………一三八



中等教科 日本文學史

吉澤義則 著

第一章 序 說

その國民の文學はその國民の精神をさながらに寫した鏡である。二千數百年の我が國文學發展の跡は、即ち我が國民の内の生活の反映である。我が國民の過去の姿をそこに見ることが出来るのである。

萬葉集を繙けば、そこに古代の我が國民が如何に忠勤であり、如何に直情的に、樂天的であつたかを知ることが出来る。源氏物語五十四帖は正史に説明しつくせない平安朝公家の内的生活を描いて

目次

第五節 洒落本讀本滑稽本

四

第六章 近代の文學

一五三

第一節 小説

一五五

一、政治小説―二、坪内逍遙と二葉亭四迷―三、硯友社と尾崎紅葉―四、幸田露伴―五、森鷗外―六、樋口一葉―七、自然主義派の人々―八、夏目漱石―九、白樺派

第二節 詩歌

一七〇

一、短歌―二、俳句―三、新體詩

附錄

文學年表

終



餘りがある。近古の文學に於ても、近世の文學に於てもすべてその時代の動靜をその作品の内に見出すことが出来るのである。過去の文學に現はれてゐる思想や感情の姿を、時の流れに沿うて降つて來るとき、そこに國民の辿つて來た足の跡、心の跡を明確に捕へることが出来るのである。かうして捕へえた過去の展開は、吾々の進むべき道を懇に教へてくれるのである。

今日外來文化心酔の反動として「古に復れ」と叫ばれてゐるが、これは過去の社會を再現せよといふ意味ではなく、古代の國民精神の中に日本人の眞の相を見出し、それに復らうとする精神である。なれてはいつとなく刺戟を失つて忘れられてゐた日本國民特有の精神に立ちかへらうとする精神である。かの世界大戦によつて、西洋文化の眞相が遺憾なく暴露され、その弱點が認識されるに至つて、從來閑却され勝ちであつた東洋文化に注意が向け

られて來た。思潮は方に物質的から精神的へ、分析から綜合へと推移してゆかうとする傾向にあるのである。こゝに於て國民も長い歐米文化心酔の夢から覺め、新しい見地に立つて、自國を凝視し、日本國民自身の眞相を見出さうとするやうになつて來た。茲に國文學史研究の使命の重大さを新に感ずるのである。

文學に國境はないと言はれてゐる。しかしその文學を構成し、その文學に生命を吹きこんでゐる國語は、その國民幾千萬年の傳統の中に陶冶せられ、生死しつゝ、今日に及んだものである。その國語が本當に用ひられるもの、その國語によつて書かれた文學が、本當に理解されるものは、その國民を措いては外にないのである。我が國文學は、當然我が國民にして始めて完全に研究せらるべきものである。

かくて我々は過去に於ける國文學變遷の跡をたづね、その本質

を究めて、國文學將來の發展に資するやう努めなければならぬのである。それがやがてまた國民の精神生活向上の道でもあるのである。

## 第二章 上古の文學

この時代は神代から奈良朝の終りまでとする。太古の茫漠たる時代はさて措いても、人皇以來千四百年餘の長い年月であり、その間新羅百濟高麗との交通が開け、次いで隋唐とも交通をするやうになり、その文化に開發され刺戟されたが、大體に於て我が國固有の思想を、純粹な「やまとことば」でもつて書き表はした時代である。

世界何れの國に於ても、律文學が散文學に先じて發達するのが常である。國文學に於ても、先づ現はれたのは歌謠である。情の發するところ詠歎となり、詠歎するところにやがて歌謠が生れるのである。古事記日本書紀にある二百首近い歌謠は、すべてが當時の原作だとは言ひ得ないとしても、未だ詩形の整はない、人々に

傳誦された、多分に民謡的色彩をもつたものであると言ふことが出来る。

敬神の心厚い我が國民は政治といはず軍旅といはず、事毎に神に祈つたものである。この時よみあげられたものが祝詞である。後世の如き巧緻な技巧はないが、それだけに素朴な壯大な感をもつた調律のある文章である。

宣命は天皇が百官庶民に告げ給ふ文章である。古樸莊重な文體で、祝詞と共に上古の文學の一面を飾るものである。

漢學渡來以來數百年の年月の間に、漸く國音を表記する方法を案出し、奈良朝になつて次第に舊辭が記録されるやうになつた。元明天皇の和銅五年には、稗田阿禮の傳誦してゐた國史が太安麻呂によつて記録され、翌六年には風土記の編述があり、元正天皇の養老四年には、日本書紀の撰著があつた。

歌謠も非常な進歩を來して、皇室を中心とする廷臣は勿論邊防に預る防人や東人に至るまで和歌を樂しむやうになり、遂に萬葉集が生れたのである。漢文學や佛教思想の影響もほの見えてはゐるが、まだ内的生活にまではひりこんではゐないで、主潮はやはり日本固有のもので、殊に祝詞にあらはれて居る雄大な氣象が採り入れられ、自然と人生に對し、素直に親しみ愛してゐる樂天的な國民性が現はれてゐる。ともあれ、千餘年も以前に、かゝる大部の而も文學的にすぐれた歌集をもつことは我が國民の誇である。

### 第一節 古事記

天武天皇御即位の十年、稗田阿禮をして皇位の繼承先代の舊事を口授せしめられたのを、元明天皇の和銅五年、勅命によつて太安麻呂が阿禮の口授を基本として撰進したものであ

日本書紀 三十卷、國初から持統天皇の朝までの事を誌してある。舍人親王等勅を奉じ養老四年撰進。

る。上中下三卷、日本書紀と同じく歴史であるが、率直に我が古代精神をあらはしたものと云ふことが出来る。漢文に漢字の音訓を交へて國語をうつすに苦心して書かれてゐるので、後世中々讀み難かつたが、本居宣長の古事記傳によつて略、その研究が大成された。

天の石屋戸

是を以て、八百萬の神、天の安之河原に神集ひ集ひて、高御産巢日神の御子思金神に思はしめて、常世長鳴鳥を集へて鳴かしめて、天安河の河上の天堅石を取り、天金山の鐵を取りて、鍛人天津麻羅を求ぎて、伊斯許理度賣の命におほせて鏡を作らしめ、玉祖命に科せて八尺勾璫の五百津の御須麻流の珠を作らしめて、天兒屋命布刀玉命を召びて、天香山の眞男鹿の肩を内抜に抜きて、天香山の天波

汗氣桶。

波迦を取りて、占へまかなはしめて、天香山の五百津賢木を根こじにこじて上枝に八尺勾璫の五百津の御須麻流の玉を取り著け、中枝に八咫鏡を取り繫け、下枝に白丹寸手青丹寸手を取りして、此の種々の物は、布刀玉命、布刀御幣と取り持たして、天兒屋命、布刀詔戸言禱ぎ白して、天手力男神、御戸の掖に隠り立たして、天宇受賣、天香山の天の日影を手次に繫けて、天の眞柝を鬘として、天香山の小竹葉を手草に結びて、天の石屋戸に汗氣伏せて、踏みとどろこし、神懸りして、胸乳を掛き出で裳緒をおし垂れき。かれ高天原ゆすりて、八百萬の神、共に咲ひき。

是に、天照大神怪しとおもほして、天石屋戸をほそめに開きて、内より告りたまへるは、「吾がこもり坐すに因りて、天原自ら聞く、葦原中國も皆聞けむとおもふを、なにかも、天宇受賣はあそびし、亦八百萬の神諸咲ふぞ」とのりたまひき。爾ち天宇受賣「汝が命

にまさりて貴き神坐すが故に、えらぎあそぶ」と言しき。かく言  
す間に、天兒屋命、布刀玉命かの鏡をさし出でて、天照大神に示せ奉  
る時に、天照大神いよ奇しと思ほして、やや戸より出でて、臨み坐  
す時に、其の隠り立てる天手力男神其の御手を取りて引き出しま  
つりき。即ち布刀玉命、久米繩を其の御後方にひき度して、「此  
より内にな還り入りましそ」と白しき。故天照大神出で坐せる  
時に、高天原も葦原中國も自ら照り明りき。

八十建

忍坂の<sup>おさか</sup>大室に到りませる時に、尾生る土雲八十建其の室に在り  
て待ちいなる。故爾に、天神の御子の命以ちて八十建に御饗を賜  
ひき。是に、八十建に宛て、八十膳夫を設けて、人毎に刀佩けて、其の  
膳夫等に、「歌を聞かばもろともに斬れ」と誨へたまひき。故其

神武天皇大和御  
平定の時のこと  
である。

の土雲を打たむとすることを明せる歌、

忍坂の 大室屋に 人さにはに 來入りをり 人さにはに 入  
りをりともし みつみつし 久米の子が 頭つつい 石つつ  
いもち うちてしやまむ みつみつし 久米の子らが 頭  
つつい 石つついもち 今撃たば善らし  
此く歌ひて、刀を抜きて、もろともに打ち殺しつ。

第二節 祝詞

神祇を祭る詞で、古くから言傳へに傳へて、祭祀の役人即ち  
中臣齋部などいふ家柄の人が唱へたものである。歌謠は個  
人的であるが、祝詞は天地開闢の有様から説き來ることが多  
く、殆ど國民全體の意思を神様に申し上げるのであるから規  
模が大層大きい。祝詞は現存してゐるものは延喜式の中に

延喜式  
五十卷、延喜五  
年時平等に勅命  
儀式朝廷臨時の  
作法等を撰辭延  
長五年畢り奉る

二十七篇、台記に中臣壽詞一篇がある。

遷却崇神祭

高天の原に神留り坐して、事始め給ひし神漏伎神漏美命以て、天の高市に八百萬の神等を神集へに集へ給ひ神議に議り給ひて、「我皇御孫之尊は豊葦原の瑞穂國を安國と平けく知ろし食せ」と、天の磐座放ちて、天の八重雲を嚴の千別に千別きて、天降り依しまつりし時に、「誰の神を先づ遣し、瑞穂の國の荒振神等を神攘ひ平けむ」と神議り議り給ふ時に、諸の神等皆量り申さく、「天、穗日命を遣して、平けん」と申しき。是をもて天降り遣す時に、此の神は返言申さずて、次に遣しし健三熊命も父の事に隨ひて、返言申さず。又遣しし天若彦も返言申さずて、高つ鳥の殃に依りて立處に身亡せき。是を以て天つ神の御言もて更に量り給ひて、經津主命、健雷

命、二柱の神等を天降り給ひて、荒振神等を神攘ひ攘ひ給ひ、神和し和し給ひて、語問ひし磐根樹立ち、草の片葉も語止めて、皇御孫之尊を天降り依さし奉りき。斯く天降り依さし奉りし四方の國中と、大倭日高見の國を、安國と定め奉りて、下つ磐根に宮柱太しき立て、高天原に千木高知りて、天の御蔭日の御蔭と仕へ奉りて、安國と平けく知ろし食さむ皇御孫尊の天の御舎の内に坐す皇神等は荒び給ひ健び給ひ、祟り給ふ事なくして、高天原に始めし事を、神ながらも知ろしめして、神直び大直びに直し給ひて、此の地よりは四方を見霽かし、山川の清けき地に遷り出でまして、吾地とうすはき坐せと進る帛幣は、明妙照妙和妙荒妙に備へ奉りて、見明らむる物と鏡翫ぶ物と玉射放つ物と弓矢、打ち斷つ物と太刀、馳せ出づる物と御馬、御酒は甕の戸高知り甕の腹滿て雙べて、米にも穎にも、山に住む物は、毛の和物、毛の荒物、大野原に生ふる物は、甘菜、辛菜、青海原に住

む物は鱧の廣物鱧の狹物、奥津海菜邊津海菜に至るまでに、横山の如く、凡物に置き足らはして奉るうづの幣帛を、皇神等の御心も明かに、安幣帛の足幣帛と平けく聞こし食して、崇り給ひ猛び給ふ事無くして、山川の廣く清けき地に遷り出て坐して、神ながら鎮り坐せよと、稱辭竟へ奉ると申す。

## 第三節 宣

## 命

國語で書かれた上古の詔勅である。祝詞に較べて散文的になつてゐる。祝詞は祭毎に繰返されたもので、諷誦を主としてゐるが、宣命は一事件毎に別であり、事柄が重大であるから、裝飾は少ない。天皇の一方に尊嚴の態度をおとりになると同時に、他方に庶民を愛し給ふ大御心があらはれてゐることとは、日本の國がらの如何に美はしかつたかを語るものである。

る。

## 文武天皇即位の詔

現つ御神と、大八島國知ろしめす天皇が大命らまと詔りたまふ大命を、うごなほれる皇子等・王・臣・百官人等、天下の公民諸、聞しめさへと宣る。高天原に事始めて、遠天皇の御世中、今に至るまでに、天皇が御子のあれまさむ彌繼繼に大八島國知らさむ次てと、天つ神の御子ながらも、天に坐す神の依さしまつりしまにま、聞こしめし來る此の天つ日嗣高御座の業と、現つ御神と大八島國知ろしめす倭根子天皇命の授け賜ひ、負せ賜ふ、貴き高き厚き大命を受けたまはり、恐みまして、此の食國天下を調へ賜ひ平げ給ひ、天下の公民を恵み賜ひ撫て賜はむとなも、神ながら思ほしめさくと詔りたまふ天皇が大命を、諸、聞こしめさへと宣る。是を以て、百官人等、四方

の食國を治めまつれと任せ賜へる國々の宰等に至るまでに天皇が朝廷の敷き賜ひ行ひ賜へる國の法を過ち犯す事なく、明き淨き直き誠の心をもちて、いや獎み獎みて緩み怠る事なく務めしまりて仕へまつれと詔りたまふ大命を、諸聞こしめさへと宣る。故かくの狀を聞こしめし悟りていそしく仕へまつらむ人は、其の仕へまつれらむ狀のまにま、品々讚め賜ひ上げ賜ひ治め賜はむものと詔りたまふ天皇が太命を、諸聞しめさへと宣る。

## 第四節 萬葉集

撰者については橘諸兄が勅命によつて撰んだといふ説や、其の他古來種々の説があるが、大伴家持が私に撰んでおいたものが傳はつたといふ説が勢力を占めてゐる。全二十卷、長歌が二百六十餘首、短歌が四千百七十餘首、旋頭歌が六十一首

ある。雄略天皇の御代から淳仁天皇の御代まで(仁徳天皇の皇后の御歌といふのがあるが、之は少し時代に疑問があるとされてゐる)の歌が集められてゐるが、天武天皇以後九十年間のものゝが大部分である。

代表歌人としては柿本人麻呂、山部赤人、山上憶良、大伴旅人、大伴家持等を首として、笠金村、額田王、大伴坂上郎女等がある。柿本人麻呂は歌聖として尊ばれてゐるが、その傳記は不明である。持統文武二朝に仕へ官位は低く、後石見國に住み、そこで死んだといはれてゐる。雄大莊嚴な格調で、特に長歌にその特色が現はれてゐる。吉野宮の歌、高市皇子殯宮の歌、近江荒都を過ぐる歌はその傑作である。

山部赤人は人麻呂と並び稱せられてゐる歌聖である。聖武天皇の御代の舍人であつたらしい。赤人は短歌に特にす



ぐれてゐる。自然の美を愛好し、純朴な表現が却つて文學的價値を高めてゐる。人麻呂は人情詩人であり、赤人は自然詩人である。

山上憶良は漢學をも佛教をもをさめた人らしく、それ等の影響をその詠歌に見ることが出来る。強い感情の持主であつたらしく、鋭い熱情がほとばしつてゐる。

大伴旅人家持父子は名門であるだけ官位も高かつた。家持は前述の如く萬葉集の撰者とされてゐる人で、第十七卷以下はその家集と見るべきものである。人麻呂や赤人、憶良の様な力強さはなく、表現法に於て漸く技巧的になつて來た。以上の外に特に注意すべきは東歌と防人の歌である。

萬葉集抄

額田王歌

熟田津に舟乗せむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

志貴皇子權御歌一首

石ばしる垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりける  
かも

岡本天皇御製歌一首

夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かずいねにけらしも

幸子吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作歌並短歌

やすみしし わご大君 神ながら 神さびせすと 芳野川  
安 見知之 吾 大君 神長 柄 神佐備世須登 芳野川  
たぎつ 河内に 高殿を 高知りまして のぼり立ち 國見  
多藝津 河内爾 高殿乎 高知 座而 上 立 國見  
をすれば 疊なはる 青垣山の 山神の 奉る御調と 春  
乎爲 波 疊 有 青垣山 山神乃 奉 御調等 春

志貴皇子  
天智天皇の第七  
皇子。光仁天皇  
の御父。

岡本天皇  
舒明天皇。

天皇は持統天皇

吉野宮

離宮の地は今の  
吉野郡中莊村字  
宮瀧の地であ  
る。

べは 花かざしもち 秋立てば もみぢかざせり ゆきそ  
 部者 花挿頭 持 秋立者 黄葉頭 刺理 逝 副  
 ふ 川の神も 大御食に 仕へ奉ると 上つ瀬に 鵜川を  
 川之神母 大御食爾 仕 奉 等 上 瀬爾 鵜川乎  
 立て 下つ瀬に 小網さし渡し 山川も よりてつかふる  
 立 下 瀬爾 小網刺 渡 山川母 依 氏 奉 流  
 神の御代かも  
 神乃御代鴨

反歌

山川もよりてつかふる神ながらたぎつ河内に舟出せずかも  
 山川毛 因而 奉 流 神長柄 多藝津河内爾船出爲 加母

柿本朝臣人麻呂短歌

淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けばこゝろもしぬに古おもほゆ  
 東の野に陽炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

登神岳山部宿禰赤人作歌一首並短歌

三諸の 神名備山に 五百枝さし 繁に生ひたる 樛の木  
 の いやつぎつぎに 玉葛 絶ゆる事無く ありつつも  
 やまず通はむ 明日香の ふるき都は 山高み 河とほし  
 ろし 春の日は 山し見がほし 秋の夜は 河しさやけし  
 あさ雲に 鶴はみだれ 夕霧に かはづはさわぐ 見る毎  
 に ねのみし泣かゆ 古思へば

反歌

明日香河川淀さらず立つ霧の思ひすぐべき戀にあらなくに  
 神龜元年甲子冬十月五日幸于紀伊國時山部宿禰  
 赤人作歌一首並短歌  
 やすみしし わご大君の 常宮と 仕へ奉れる さひか野  
 ゆ 背に見ゆる 沖つ島 清きなぎさに 風吹けば 白浪  
 さわぎ 潮干れば 玉藻苅りつつ 神代より 然ぞ尊き

玉津島山

反歌

わかの浦に潮満ちくれば鴻を無み葦邊をさして鶴鳴き渡る

思子等歌一首

山上憶良

瓜食めば子等思ほゆ 栗食めばましてしぬばゆ いづ

くより來りしものぞ まなかひに もとな懸りて 安寝

しなさぬ

反歌

しろがねも金も玉も何せむにまされる寶子に如かめやも

山上臣憶良沈痾之時歌一首

をのこやも空しかるべき萬代に語りつぐべき名は立てずし

て

大伴坂上郎女柳歌一首

うち上る佐保の河原の青柳は今は春べとなりにけるかも

大伴坂上郎女與姪家持從佐保還歸西宅歌一首

わが背子が著る衣薄し佐保風はいたくな吹きそ家に至るま

て

帥大伴卿歌

吾さかりまたをちめやもほとほとに寧樂の都を見ずかなり

なむ

淺茅原つばらくに物思へばふりにし里のおもほゆるかも

喻族歌一首並短歌

大伴家持

ひさかたの天の戸開き 高千穂の 嶽に天降りし 皇祖

の神の御代より 梶弓を 手握り持たし 眞鹿兒矢を

手挟み添へて 大久米の 丈夫武雄を 先に立て 鞞取り

負せ 山河を 磐根さくみて 履みとほり 國覓しつつ

帥大伴卿  
大伴族人。

千早ぶる 神をことむけ 服まつら從はぬ 人をも和やはし 掃き清  
 め 仕へ奉りて 秋津島 大和の國の 檀原の 畝傍の宮  
 に 宮柱 太知り立てて 天の下 知らしめしける 皇祖  
 の 天の日嗣と つぎて來る 君の御代々々 隱さはぬ  
 赤き心を 皇方すべらに 極め盡して 仕へ來る 祖の職と 言  
 立てて 授けたまへる 子孫うまのこの いや繼ぎ繼ぎに 見る人  
 の 語りつぎてて 聞く人の 鑒あきにせむを 惜おぼしき 清き  
 その名ぞ 凡まろかに 心思こころひて 虚言うそも 親の名斷つな  
 大伴の 氏と名に負へる 健男たけおとこの伴

短歌

しきしまの倭の國に明らけき名に負ふ伴の緒こゝろ勸めよ  
 劔刀つるぎたちいよゝ研ぐべし古ゆ清きよけく負ひて來にしその名ぞ

東歌

心こころもなく我がゆく道に青柳のはりて立てれば物思ものひ出つも  
 防人の歌 今奉部與曾布  
 今日よりは顧みなくて大君の醜みにくの御楯みたてと出で立つ吾は

旋頭歌

白珠は人に知らえず知らずともよし知らずとも吾れし知ら  
 ば知らずともよし

## 第三章 中古の文學

唐の文化の輸入によつて奈良朝の華々しい文化が生まれたが、平安朝當初には、文學方面にこの傾向強く、そのため一時國文學は表面に活躍することなく、漢詩文の全盛を來し、内親王にして詩文に巧な御方が出られ、また詩文集の編纂をさへ見るに至つた。

しかしかゝる状態もやがて國民的自覺をよび起すにつれて、ただ摸倣にのみ趨つた状態から漸次咀嚼同化と轉化して來た。特にこの初期に生み出された假名文字は國文學の上に一大飛躍を將來した。文字を有たなかつた國民は自由に國語をうつすことが出来るやうになり、韻文に於ても散文に於ても相前後して著しい發達をなした。而も和歌の發達と賞翫とはあらゆる文學の發達の根柢をなした。

和歌は、一時たゞ私的の交際の具にのみ用ひられてゐたが、山紫水明の地と、情趣的氣分に満ちた貴族社會とに育まれ再び隆盛となり、遂に古今集の撰進となつた。この集は勅撰和歌集の最初のものであつて、これより次々に多くの勅撰集が出ることになつた。一方散文の方では物語の祖といはれた竹取物語を初め、歌物語ともいふべき伊勢物語、國文の日記の初めである土佐日記が出て、つゞいて、宇津保物語、落窪物語等が漸次世に現はれ、藤原氏の全盛と共に、文學の方面にも黄金時代が現出し、遂に國文學の高峯、源氏物語枕冊子の二大双壁を生むに至つた。しかしこの以後は清紫の摸倣にとゞまり傑作とすべきものは出でず、たゞ特色ある歴史物語として大鏡、榮華物語、雜纂物として今昔物語等が出てゐるに過ぎない。その内、大鏡は文學的價值から見て注意すべきものである。

要するにこの時代の文學は、平安京の平和な風光と、貴族社會の詩歌に、音樂に、舞踏に、風流閑雅の技を弄び、長き裳裾を引いて宮仕へした優美な餘裕のある生活の内に生長しただけに、多くのすぐれた作品を残してゐるが、すべて上流社會の間に發達したもので、未だ下流社會の狀態を寫した作品は殆ど世に出なかつた。

第一節 古今和歌集

古今和歌集、略して古今集ともいふ。醍醐天皇の延喜五年に紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑等が勅を奉じて撰んだ歌集で、萬葉集以外の古歌と其の後の名歌撰者等の詠、千百首程を載せてをり、卷數も廿卷あつて、萬葉の後を繼がうとしたものである。萬葉集に比べると儒教や佛教の思想がかなり國民の精神生活に喰入つたためか、自然に對する憧憬も單純

な感情からのみでなく、かなり智的な技巧が加はり、平安朝の情趣生活が表現されて主觀的抒情にかたむいて來た。歌の調子は五七の調子がなくなつてすべて七五調になつてゐる。

古今集抄

舊年に春立ちける日詠める 在原元方  
年の内に春は來にけり一年をこぞとや云はん今年とや云はん

題知らず

讀人知らず

春日野の飛火の野守出でて見よ今幾日ありて若菜摘みてん

春の夜梅の花を詠める

躬恒

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るゝ

春の歌として詠める

素性

思ふどち春の山べにうち群れてそことも云はぬ旅寢してし  
が

亭子院  
宇多天皇

亭子院歌合の時詠める

伊

勢

見る人もなき山里の櫻花ほかの散りなん後に咲かまし

題知らず

讀人

知らず

さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

是貞の親王の家の歌合の歌

紀

友

則

露ながら折りてかざさん菊の花老いせぬ秋の久しかるべく

雲林院の木の蔭に佇みて詠

みける

僧

正

遍

昭

わび人の分きて立ち寄る木の下は頼む蔭なく紅葉散りけり

大和國にまかりける時に雪

の降りけるを見て詠める

坂

上

是

則

朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪

題知らず

讀人

知らず

わたつみの濱の眞砂を敷へつゝ君が千年の有り數にせん

隱岐國に流されける時に船に乗りて出て立つ

とて京なる人の許に遣しける 小野篁朝臣

わたの原八十島かけて漕出でぬと人には告げよ海人の釣舟

題知らず

小

野

小

町

思ひつゝ寝ればや人のみえつらん夢と知りせば覺めざらま  
しを

題知らず

忠

岑

命にも勝りて惜しくある物は見はてぬ夢のさむるなりけり

主人身まかりにける人の家

の梅の花を見て詠める

貫

之

母みこ云々

業平朝臣の母の  
みこ長岡に住み  
侍りける時に、  
業平宮仕すとて  
時々も得まかり  
とぶらはず侍り  
ければ、師走ば  
かりに母のみこ  
の事とて文をも  
てもうできた  
り。あけて見れ  
ば言葉はなくて  
ありける歌  
老いぬればさら  
ぬ別のありとい  
へばいよ見ま  
くほしき君かな

色も香も昔の濃さに匂へども植ゑけん人の影ぞ戀しき

母みこへのかへし 業平朝臣

世の中に然らぬ別れの無くもがな千代もと歎く人の子のた  
め

冬の加茂の祭の歌 藤原敏行朝臣

ちはやぶる加茂の社の姫小松萬代經とも色は變らじ

第二節 竹取物語

作者は不明であるが、我が國最初の小説といはれてゐる。

竹の中から生れ出た赫耶姫を主人公とした物語で、全く架空  
的のローマンスである。文章簡素で、初期の作品であること  
がうかがはれる。

かぐや姫

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて、竹を取  
りつゝ、萬の事につかひけり。名をば讃岐の造麿となむいひける。  
その竹の中に、本光る竹ひとすぢありけり。怪しがりて寄りて見  
るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人いと美し  
うて居たり。翁いふやう、「われ朝毎夕毎に見る竹の中におはす  
るにて知りぬ。子になり給ふべき人なめり」とて手にうち入れ  
て家に持て來ぬ。妻の姫にあづけて養はず。美しきこと限なし。  
いと幼ければ籠に入れて養ふ。竹取の翁この子を見つけて後に、  
竹をとるに、節を隔て、よごとに、金ある竹を見つくること重りぬ。  
かくて翁やう／＼豊かになり行く。この兒やしなふ程に、すくす  
くと大になりまさる。三月許になる程に、よきほどなる人になり



裳著  
裳を始めて著す  
る祝  
けうら  
清らかなこと。

ぬれば髪上などさだして、髪上せさせ裳著す。帳の内よりも出さず、いつきかしづき養ふ程に、この兒の容かたちけうらなること世になく、家の内は暗きところなく光満ちたり。翁心地あしく苦しき時、この子を見れば苦しき事も止みぬ。腹立たしきことも慰みけり。

## 第三節 伊勢物語

在原業平の行跡を歌に依つて書いたもので、歌が主になつてゐて、文章はその序のやうになつてゐる。竹取物語と異つて、業平といふ實在の放浪貴人を主人公とし、その生活を彼の歌を主な根據として書きあらはしたものである。作者は業平であるとは云はれないが、業平自身の日記のやうなものがあり、それを本にして後人が手を入れたものであらう。文章は簡潔で、竹取物語とともに後世の物語に影響を與へてゐる。

## 東 下 り

昔男ありけり。その男身を益なきものに思ひなして、京には居らじ東の方にすむべき國もとめむとて往きけり。もとより友とする人、一人二人していきけり。道しれる人もなくて惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蛛手なれば橋を八つ渡せるによりてなむ八橋とはいへる。その澤の邊の木の蔭におり居て餉くひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。それを見てある人の曰く、「かきつばたといふ五文字を句の上にするて旅の心を詠め」といひければよめる。

唐衣きつ、馴れにしつましあればはるばる來ぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、みな人餉の上に涙落してほとびにけり。

行き行きて駿河の國に至りぬ。宇津の山に至りて我が入らむとする道はいと暗う細きに、蔦楓生ひしげり物心ほそく、すぞろなるめを見る事と思ふに、修行者あひたり。「かゝる道にはいかでかいまする」といふに見れば、みし人なりけり。京にその人の許にとて文かきてつく。

駿河なるうつゝの山邊のうつゝにも夢にも人に

逢はぬなりけり

富士山を見れば五月のつごもりに雪いと白う降りり。

時しらぬ山はふじのねいつとてか鹿の子まだ

らに雪の降るらむ

この山はこゝにたとへば比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむ程にして、なりは鹽尻のやうになむありける。

猶行き行きて武藏の國と下總の國とのなかにいと大いなる河あり。それを角田川といふ。その川の邊にむれゐて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守「はや舟に乗れ、日も暮れなむ」といふに、乗りて渡らむとするに、皆人もわびしくて京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも白き鳥の嘴も脚も赤き鳴の大ききなる、水の上にあそびつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人え知らず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて

名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

#### 第四節 土佐日記

紀貫之が土佐守の任期が終り京へ歸へる出發の前後から都へ歸着するまでの日記である。當時男子はすべて日記を漢文を以て書いてゐた。古今集の撰者として和歌の上に於ける第一人者であつた貫之は、散文に於ても、今まで婦人用の文字とされてゐた假名を以て日記を書き、又古今集の序等も假名で書き、この方面の開拓者としての名譽をも受けるべき人である。

## 出でたち

男もすなる日記といふものを、女もして見むとてするなり。その年の十二月二十日あまり一日の日の戌の時にかどです。そのよしいさゝか物に書きつく。

ある人、縣の四年五年はてて、例の事ども皆しをへて、解由など取

その年  
朱雀天皇の承平  
四年

りて、すむ館より出でて、舟に乗るべき所へわたる。これかれ、知る知らず、おくりす。年比としよく具しつる人々なむ、わかれ難く思ひて、其の日、しきりにとかくしつゝのゝしるうちに、夜更けぬ。(中略)

二十日、昨日のやうなれば舟いださず、みな人々うれへ歎く。苦しく心もとなければ、たゞ日の經ぬる數を、今日いくか、二十日三十日とかぞふれば、指さしもそこなはれぬべし。夜はいも寢ず、いとわびし。二十日の夜の月出でにけり。山の端もなく、海の中よりぞ出でくる。かうやうなるを見てや、むかし安部仲麿といひける人は、もろこしに渡りて、歸り來たる時に、舟に乗るべき所にて、かの國人、うまのはなむけし、わかれ惜しみて、彼所のからうたつくりなどしける。あかずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありけり。その月は、海よりぞ出でける。これを見て、仲麿のぬし「我が國にはかゝる歌なむ、神代より神もよみたび、今は上中下の人も、か

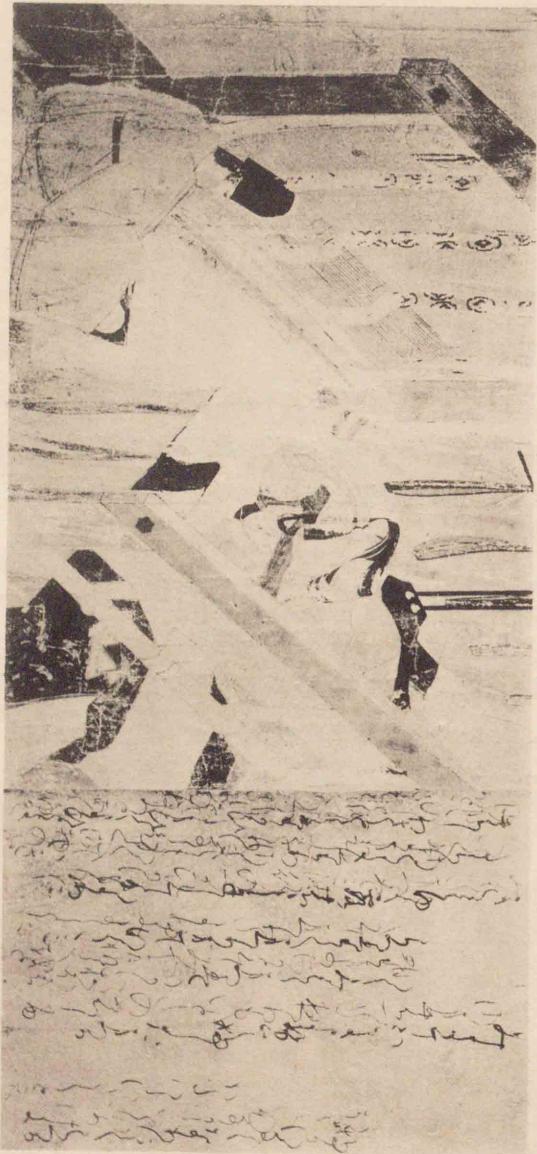
うやうに別をしみ、よろこびもあり悲しみもある時には詠むと  
てよめりける歌

あをうなばらふりさけ見れば春日なる三笠の山に  
いでし月かも

とぞよめりける。かの國の人、聞き知るまじく覺えたれど、この  
心を、男文字にさまを書き出して、この詞傳へたる人に、いひ知ら  
せければ、こゝろをや聞き得たりけむ、いと思の外になむ愛でける。  
唐土とこの國とは、ことば異なるものなれど、月の影はおなじこと  
なるべければ、人の心も同じことにやあらむ。さて今、そのかみを  
思ひやりて、或人のよめる歌

都にてやまのはに見し月なれど波より出でて波に  
こそ入れ

男文字  
漢字。



源氏物語繪卷

### 源氏物語繪卷

この繪卷は現存の繪卷中最も年代の古いもので、物のあはれを背景とする優美な藤原趣味の洋溢したものである。作者は藤原末期に在世した藤原隆能であるといはれてゐる。隆能は當時の大和繪の大家であり、この繪卷の製作年代もその頃と思はれる。細く柔かな描線に所謂つくり繪のみやびやかな賦色をしたものである。

詞書も繪に劣らぬ美しいもので流麗な藤原時代特有の草假名である。世尊寺伊房の筆であるといはれてゐる。藤原時代の草假名として最も珍重すべきものである。

とつす、しのはしやちやきう中をあらしんめく、此の身とあつる

### 第五節 源氏物語

作者紫式部は當時の學者藤原爲時の女で、藤原宣孝に嫁し二女を擧げたが、宣孝の死後一條天皇の中宮上東門院彰子に仕へた。その私生活に就ては分明を缺いてゐるが、當時としては稀に見る貞淑な婦人であつたやうである。

源氏物語は全編五十四帖。初めの四十四帖は光源氏を主人公として、その模範的貴公子のはなやかな、しかも圓滿な一生涯をうつし、後編十帖は俗に宇治十帖と稱せられてゐて、光源氏の子董大將の、源氏の得意の生涯に反して、之は失意の生涯をゑがいたものである。前後二編の構想、人物描寫の上から言つても、我が國文學史上の最大産物の一といはれるのは當然

のことである。

須磨

大殿  
左大臣殿。

御方  
葵の上の居られ  
たところ。  
むかし侍ひし  
葵の上世中に  
仕へてゐた。

二三日かねて大殿おほいどのに世に隠れてわたり給へり。網代車のうちやつれたるに、女のやうにてかくろへ入り給ふもいとあはれに、夢とのみおぼゆ。御方いとさびしげにうち荒れたる心地して、若君の御乳母おのども、むかし侍ひし人の中にまかで散らぬかぎり、かくわたり給へるを珍らしがり聞えて、まうのほり集どひて見奉るにつけても、殊にもの深からぬ若き人々さへ、世の常なさ思ひ知られて涙にくれたり。わか君はいと美しうてざれ走りおはしたり。「久しき程に忘れぬこそ哀なれ」とて、膝にすゑ給へる御氣色忍びがたげなり。大臣こなたに渡り給ひて對面たいめんし給へり。「つれづれに籠らせ給へらむ程、何と侍らぬ昔物語も、まゐりきて聞えさせむ

命長きは  
莊子「壽則多  
辱」

と思ひ給ふれど、身の病おもきによりおほやけにもつかうまつらず、位をも返し奉りて侍るに、私さまには腰のべてなど、ものゝ聞えひがくしかるべきを、今は世の中憚るべき身にも侍らねど、いちはやき世のいと怖しう侍るなり。かゝる御事を見給ふるにつけて命長きはこゝろうく思ふ給へらるゝ世の末にも侍るかな。天の下を逆さまになしても思ひ給へよらざりし御有様を見給ふれば、よろづいとあぢきなくなむ」と聞え給ひて、いたうしほたれ給ふ。「とあることもかゝることも前の世の報にこそ侍るなれば、いひもてゆけば、たゞみづからの懈怠けんたいになむ侍る。さしてかく官爵をとられず、あさはかなる事にかかづらひてだに、おほやけのかしこまりなる人の、うつしざまにて、世の中にありふるは咎重とがむかきわざに人の國にもし侍るなるを、遠く放ち遣すべきさだめなども侍るなるはさまことなる罪に當るべきにこそ侍るなれ。濁りなき

院  
源氏の父帝。桐  
壺の帝。

行平  
在原行平、業平  
の兄、平安朝初  
期の歌人。  
藻鹽たれつゝ、  
わくらばに問ふ  
人あらばすまの  
浦にもしほたれ  
つゝわぶと答へ  
よ。(古今集)

心にまかせて、つれなく過し侍らむもいとばかり多く、これより  
大きな恥に臨まぬさきに、世を遁れなむと思ふ給へたちぬる」  
など、こまやかに聞え給ふ。昔の御物語院の御事思しのたまはせ  
し御心ばへなど聞え出で給ひて、御直衣の袖もひき放ち給はぬに、  
君もえ心強くも、もてなし給はず。若君の何心なく紛れありきて、  
これかれに馴れ聞え給ふをいみじと思したり。(中略)  
おはすべき所は、行平の中納言の藻鹽たれつゝわびける家居近  
きわたりなり。海づらは、やゝ入りて、あはれに心すごげなる山中  
なり。垣のさまより初めてめづらかに見給ふ。かや屋ども蘆ふ  
ける廊めく屋などをかしうしつらひなしたり。所につけたる御  
すまひ、様かはりて、かゝる折ならずばをかしうもありなましと、昔  
の御心のすさび思し出づ。

枕册子  
普通には枕草子  
或は枕草紙と書  
かれてあるが假  
名遣から言つて  
も意味から言つ  
てもかく書く方  
が正しい。

第六節 枕 册 子

作者清少納言は歌人清原元輔の女で、紫式部が中宮彰子に  
お仕へしたのに對し、皇后定子に奉仕し、中宮皇后並び立ちて  
互に勢力を争はれたやうに、紫式部と清少納言とは互に文名  
を競ひ、一方が源氏物語を残したのに對し、他方は枕册子を残  
した。枕册子は折にふれた感興や、見聞を描寫して斷片的に  
書き綴つたものである。觀察が鋭利て氣がきいてをり巧に  
當時の上流社會の有様が寫生されてゐる。源氏物語の如き、  
緩やかに平野を流れる大河のやうなところは、ないが變化に  
富んだ谷川のやうな趣があつて、短く力強い文である。

五 節 句

正月一日、三月三日は、いとうらゝかなる。五月五日は、曇りくらしたる。七月七日は曇り、夕かたは晴れたる空に、月いとあかく、星のすがた見えたる。九月九日は、曉がたより雨すこし降りて、菊の露もこちたくそぼち、おほひたる綿なども、いたく濡れ、うつしの香も、もてはやされたる。つとめては止みにたれど、猶曇りて、やゝもすれば、ふり落ちぬべく見えたるもをかし。

## すさまじきもの

すさまじきもの。晝ほゆる犬。春の網代。三四月の紅梅のきぬ。ちごのなくなりたるうぶ屋。火おこさぬ火桶、炭櫃。牛にくみたる牛飼。博士のうちつゞき女子うませたる。方違にゆきたるに、あるじせぬ所。まして節分はすさまじ。人の國よりおこせたる文の物なき。京のをも、さこそは思ふらめども、されどそれは、

ゆかしき事をも書きあつめ、世にある事を聞けばよし。人の許にわざと清げに書きたててやりつる文の、返事見む、今は來ぬらむかしと、怪しく遅きと待つ程に、ありつる文の、結びたるも立文も、いと汚げに持ちなしふく、だめて、うへに引きたりつる墨さへ消えたるを「おこせたりけり、おはしまさざりけり」とも、もしは「物いみとて取り入れず」などもて歸りたる、いとわびしくすさまじ。

## 木の花

木の花は、梅の濃くも薄くも紅梅。櫻の花びら多きに葉色濃きが枝細くて咲きたる。藤の花、しなひ長く色よく咲きたる、いとめでたし。卯の花は、品劣りて何となけれど、咲く頃のをかしう、郭公の陰に隠るらむと思ふにいとをかし。祭のかへさに、紫野のわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などに、いと白う咲きた



るこそをかしけれ。青色の上に白き單重かづきたる、青朽葉にかよひて、いとをかし。四月のつごもり、五月のついたちなどの頃ほひ、橘の濃く青きに、花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは、世になく心あるさまにをかし。花の中より、實のこがねの玉かと見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、朝露に濡れたる櫻にも劣らず。郭公のよすがとさへ思へばにや、猶更に云ふべきにもあらず。梨の花、世にすさまじくあやしき物にして、目に近く、はかなき文附けなどだにせず。愛敬おくれたる人の顔など見れば、たとひにいふも、げに其の色よりして、あいなく見ゆるを、もろこしに限りなき物にて、文にも作るなるを、さりともあるやうあらむとて、せめて見れば、花びらの端にをかしき句こそ、心もとなくつきためれ。楊貴妃、帝の御使にあひて泣きける顔に似せて、「梨花一枝春雨を帯びたり」など云ひたるは、臙げならじと思ふに、猶い

ことくしき名  
附きたる鳥  
鳳凰のこと。

みじうめてたき事は、たぐひあらじと覺えたり。桐の花紫に、咲きたるは、猶をかしきを葉のひろごり、さまうたてあれども、又こと木どもと等しう云ふべきにあらず。もろこしにことくしき名附きたる鳥の、これにしも栖むらむ、心ことなり。まして琴に作りて、様々なる音の出でくるなど、をかしとは世の常に云ふべくやはある。いみじうこそはめてたけれ。木のさまぞにくげなれど、棟の花いとをかし。

## 第七節 大

## 鏡

大宅世繼と云ふ百五十一歳の老爺と夏山繁樹といふ百四十餘歳の年寄が、雲林院の菩提講に参り合ひ昔語をしあひ、その間に聽者の青侍の批評的な語を交へるといふやうな趣向によつて、藤原氏の全盛の有様を書いた歴史物語である。文

章は中々姿致に富み、勢があつて強いところがあるから、恐らく男子の手になるものであらう。榮華物語は時代順に記述されてゐるが、これは史記にならつてか列傳體になつてゐる。榮華物語がたゞ道長の榮華を歎美してゐるのに對し、これは間々褒貶の意を加へ、文學的にもこの方がすぐれてゐる。

## けづり屑

花山院の御時に、五月下つ闇に、五月雨も過ぎて、いとおどろしくかきみだれ雨の降る夜、帝さうくしくや思しめしけむ、殿上に出でさせおはして、あそびおはしましたしけるに、人々御物語などし給ひて、むかしおそろしかりける事どもなどに申しなり給へるに、  
「今宵こそいとむづかしげなる夜なめれ。かく人がちなるだにけしきおほゆ。まして物離れたる所などいかならむ。さらむ所

吉上  
衛府より陣に召  
上る下部也。

右衛門  
宜秋門の内後涼  
殿の西にあり。

に一人往なむや」と仰せられけるに、「え罷らじ」とのみ申し給ひけるを、入道殿は、「いづくなりとも罷りなむ」と申し給ひければ、さる所おはします御門にて、「いと興ある事なり。さらば往け。道隆は豊樂院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へ往け」と仰せられければ、よその君たちは、便なき事をも奏してけるかなと思ふ。又承らせ給へる殿ばらは、御氣色變りて、益なしと思したるに、入道殿は、つゆさる御氣色もなく、「わたくしの從者をば、具し候はじ。この陣の吉上にまれ、瀧口にまれ、一人昭慶門まで送れと仰言たべ。それよりうちには、ひとり入り侍らむ」と申し給へば、「證なきこと」と仰せらるれば、「げに」とて御手箱におかせ給へる小刀申して立ち給ひぬ。今二所もにがむく、各おはさうしぬ。

子四つと奏して、かく仰せられ議するほどに、うしにもなりにけむ。「道隆は右衛門の陣より出でよ。道長は承明門より出でよ」

とそれさへわかせ給へば、しかおはしましあへるに、中關白殿陣まて念じておはしたるに、宴の松原のほどに、その者ともなき聲どもの聞ゆるに、ずちなくてかへり給ふ。栗田殿は、露臺の外までわななくくおはしたるに、仁壽殿の東面の砌のほどに、簷とひとしき人のあるやうに見え給ひければ、ものも覺えて、「身の候はばこそ仰言も承らめ」とて、各立歸り參り給へれば、御扇を叩きて笑はせ給ふに、入道殿はいと久しう見えさせ給はぬをいかゞとおぼしめすほどにぞ、いとさりげなく、ことにもあらずげにて、まゐらせ給へる。「いかにく」と問はせ給へば、いとのだやかに、御かたなに削られたるものを取具して奉らせ給ふに、「こは何ぞ」と仰せらるれば、「たゞにてかへりまつりて侍らむは證さぶらふまじきによりて、高御座の南面の柱のものを削りとりて候ふなり」とつれなく申し給ふに、いとあさましう思し召さる。こと殿原の御氣色

は今にもなほ直らで、この殿のかくてまゐり給へるを、御門よりはじめ、感じの、しられ給へど、うらやましきにや、又いかなるにか、ものもいはでぞ候ひ給ひける。なほ疑はしく思し召されければ、つとめて、藏人して、「削り屑をつかはして見よ」とおほせごとありければ、もていきて、おしつけて見たうびけるに、つゆたがはざりけり。その削りあとはいとけざやかにて侍るめり。末の世にも見る人はなほあさましき事にぞ申し、かし。

第八節 榮華物語

赤染衛門の作だといはれてゐるが根據がなく、誰の作とも明かにされてゐない。たゞその儀式とか祭とかの、衣服からその周囲の有様が詳密に書かれ、表面的なことばかりが多く、文章も柔かであるから、多分女の手になるものと思はれる。

藤原氏の榮華をうつしたことは大鏡と同一であるが、これは全く道長を人間の理想的標本として書いてゐる。

田 植

賀茂の祭なども過ぎて、五月になりぬ。大宮、土御門殿におはしませば、殿何事をして御覽ぜさせんと思しめして、この殿の御厩の秣の田は、殿の北清和院と云ふ所にぞ植ゑける。此の頃植うべかりければ、御厩の司召して、「この田植ゑん日は例の有様ながら繕ひたることなくて、をこがましう、いかにもありのまゝにて、この南の方の馬場の御門より歩み續かせて、埒の内より通して北さまに渡すべし。丑寅の方の築地を崩して、それより御覽じやるべきなり。東の對にてなむ御覽すべき」と仰事うけ給ひて、今二三日の程に何業せんと思ひて、其の日になりて、かの隅の築土崩させ給ひ

大宮  
上東門院。  
殿  
道長。

て、東の對に宮殿の上渡らせ給ふ。女房達候ふ限は參る。

若うきたなげなき女ども五六十人ばかりに、裳衣といふものいと白う著せて、白き笠どもきせて、はぐろを黒らかに、紅赤う假裝させて續け立てたり、田あるじと云ふ翁いと怪しききぬ著、破れたる日笠さして、紐解きて足駄はきたり。怪しき様したる女ども、黒搔練きせて、はふにといふものぬりつけて、かづらせさせて、笠さゝせて足駄はかせたり。又田樂といひて、怪しきやうなる鼓腰にゆひつけて、笛吹き、佐々良と云ふものつき、さまぐのまひして、あやしのをのこども歌うたひ、心地よげにほこりて、十人ばかりあり。そが中に、この田つゞみといふものは、例のにも似ぬ音して、とぼくとぞならしいくめる。したしうものしたまふ殿ばら、東の簀子にて見給ふ。若き君たち四位五位などは、高欄におしかゝりて見興じたまふ。又いと大きな桶、折櫃どもに、これらが食物どもなる

べし、もてつゞきたり。さまざま珍しきものどもをのみもて續けたれば、いみじうめづらしう御覽ず。さていきつどひて、今は植ゑのゝしるを御覽じやりて、いとをかしと思しめさる。さりつる樂のものどもも、道の程つゝましげに思ひたりつるが、かしこにては、我まゝにのゝしり遊びたる様ども、いみじうをかし。をりしも雨少しふりて、田子の袂どももしほとけげなり。いつの程にか來集りけん、世人數しらず並みたちて、見る顔どもさへぞ、をかしう御覽じける。

## 第四章 近古の文學

公家の文化が亡び、武家の文化が起り、すべてがその影響をうけてゐる。平安朝は華やかであつたが、近古は陰鬱である。これはうちつゞく戦亂に人心が荒廢し、平家のやうに盛大であつたものが、一朝にして滅亡してゆくのを目睹し、その上に打ち續く天變地異に世の無常を強く感ずるに至つた。この機運に乗じて勃興したのが佛教である。平安朝に盛んであつた天台眞言の二宗は、教理深遠にして一般民衆がその本意を知るには困難であつた。平安朝の佛教は、華やかな儀式に人目を奪つたが、人心にくひ入ることとは出來なかつた。ところが、この時代になつて時代思潮は遂に一般民衆の耳に入り易い佛教を生むに至り、淨土宗・淨土眞宗・法華宗の如き日本的宗教は、無常觀を有する近古人を廣く支配した。

又一方質實を旨とする武士階級には禪宗が廣まり、それにつれて禪宗の趣味が一般文化の上にも影響を與へた。文學に於ても武家は戦争に暇なく、公家には前時代の如き活氣なく、たゞ僧侶の手によつて維持されてゐた觀がある。

勿論鎌倉初期は一般に非常に活氣があり、和歌に於ては定家・家隆・西行等があり、朝廷に於ても後鳥羽天皇の如き、歌道に御熱心で、天皇の命によつて撰ばれたのが新古今集である。

武家の勢力が強大になるにつれて公家を中心としたものは次第に影をひそめ、武人の功名談等が人々の嗜好に適するやうになつて、所謂軍記物が發達した。その文章は漢語を混へて餘程強くなり、近世の和漢混淆文の基礎を形づくつてゐる。平家物語源平盛衰記保元物語平治物語太平記等はそれである。

人事變遷の烈しい時代であつたから、自然厭世的な思想をもつ

た作品があらはれた。この方面の作品として方丈記と徒然草とをあげることが出来る。

從來の系統を延いた雜史日記紀行などには、大鏡について作られたものに水鏡・増鏡があり、雜史物として特色のあるものに神皇正統記がある。神皇正統記は北畠親房が南朝の正統なることを明かにするために書いたもので、堂々たる議論で文章としてもすぐれたものである。日記紀行には十六夜日記海道記東關紀行等があり、今昔物語に類するものに宇治拾遺物語がある。

然し文學史上よりこの時代に見るべきものは、之等よりも寧ろ後期に發達した謠曲・狂言及び連歌である。

しかし要するにこの時代は全體として見るときは文學は衰へてゐたのであるが、上流社會から漸次下流社會に下り、平民的性質を多分に帯びて來て、近世に於ける平民文學勃興の素地をつくつ

た點で注目すべき時代である。

第一節 新古今和歌集

略して新古今集といふ。二十卷。後鳥羽上皇の勅により藤原定家・藤原家隆・藤原有家・藤原雅經・藤原通具の五人が之を撰した。古來古今集と共に勅撰の双璧と稱せられてゐる。

歌風は萬葉集・古今集と相對し、萬葉集は、表現的で感覺的で有りのままを表はし、古今集になると理智的になり自然でも人事でも有のままでなく作者の思想を通してうたひ、新古今集に至ると、實景でもなく、實感でもなく、客觀化したものでもない。内在の心で幻想的・浪漫的な境地を表はさうとしてゐる。ために技巧の方面に多大の發達を遂げ、歌風優婉・詞句清新巧緻を極めてゐる。ともかく萬葉・古今・新古今と我が歌風

の三分野をなし、長く後世の歌壇を支配してゐる。

新古今集抄

攝政太政大臣  
藤原良經。

春立つ心を詠み侍りける 攝政太政大臣

みよし野は山も霞みて白雪のふりにし里に春は來にけり

をのこども詩をつくりて歌に合せ侍りしに水

郷春望といふことを 太上天皇

見渡せば山もとかすむ水無瀬川ゆふべは秋となに思ひけむ

攝政太政大臣の家の百首の歌合に春曙といふ

心をよみ侍りける 藤原家隆朝臣

かすみ立つすゑの松山ほのくくと浪にはなるゝ横

太上天皇  
後鳥羽上皇。

雲の空

題しらず

會禰好忠

會禰好忠  
會丹と綿名され  
官位低く當時は  
いやしめられて  
ゐたが特徴のあ  
る歌をよんだ。

荒小田の去年の古根の古よもぎ今は春べとひこば  
えにけり

不明不暗朧々月といへる事を 大江千里

照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしく物  
ぞなき

五十首歌奉りし時

寂蓮法師

寂蓮

俊成の甥で、そ  
の養子になる。

くれて行く春の湊は知らねども霞におつる宇治の

柴舟

山家曉郭公といへる心を

後徳大寺左大臣

後徳大寺左大臣  
藤原實定。

小笹ふくしづのまろやのかりの戸を明方になく郭  
公かな

五十首歌奉りし時

前大僧正慈圓

掬ぶ手に影みだれ行く山の井のあかでも月の傾き  
にけり

題しらず

寂蓮法師

淋しさはその色としもなかりけり楨たつ山のあき  
の夕暮

題しらず

西行法師

心なき身にもあはれはしられけり鳴立つ澤の秋の  
夕ぐれ

西行法師すゝめて百首の歌よませ侍りけるに

藤原定家朝臣

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の  
ゆふ暮



題しらず

俊惠法師

立田山こずゑまばらになるまゝに深くも鹿のそよ  
ぐなるかな

百首の歌の中に

式子内親王

あともなき庭の淺茅にむすほほれ露のそこなる松  
蟲の聲

五十首の歌奉りしに

藤原雅經

秋の色をはらひはてゝや久方の月のかつらに木枯  
のかぜ

深山落葉といへる心を

源俊賴朝臣

日暮るればあふ人もなしまさき散る峯の嵐の音ば  
かりして

定家朝臣の母身まかりて後秋の頃墓所近き堂

にとまりてよみ侍りける

皇太后大夫俊成

まれにくる夜半も悲しき松風をたえずや苔の下に  
聞くらむ

小式部の内侍身まかりて後常にもちて侍りけ

る手箱を誦經にせさすとてよみ侍りける

和泉式部

戀わぶと聞きにだにきけ鐘の音に打忘らるゝ時の  
まぞなき

旅の心を

有家朝臣

ふしわびぬ篠の小笹のかり枕はかなの露や一よば  
かりに

題しらず

西行法師

ふるはたの岨の立木にゐる鳩の友よぶこゑのすど

き夕暮

題しあず

清輔朝臣

長らへばまた此の頃やしのばれむうしと見し世ぞ  
今は戀しき

第二節 平家物語

十二卷。作者は古來諸説あつて詳かでない。平家の勃興から遂に一族西海に沈んでしまつた二十餘年間の榮枯盛衰のあとを記述したものである。その中には軍記もあり、人情話もあり、風流話もあつて、優美の所と強健な所とがあり、後の太平記等に比して變化に富んでゐる。文章は和漢混淆體で、雄健流麗軍記物語中の白眉である。

祇園精舎の事

捧奉り押破り乱入及て賊上と雖も、白く才斜らう入  
内蔵以平教威期たむ衣ニテ右東門陣ニ作ら上皇  
山ノ大原ニ作り平中納言清盛ヲ追討ス平がニ平後  
都へ入上侍者ノ之相多りケルニヤ同ケレハ平家一教ニ波  
羅(地集)上下同尊よりケレト之右兵未替重威ハ  
一人ノ行故ニ只とサレハ中ノトテ解リシケル上皇大珍  
思食テ急ニ六波羅(清幸ナル平中納言清盛ニ大ニ  
畏リ給サレケリ山ノ大原清水寺(押家ヲ焼研ヘ)  
中岡ケリ去七日ノ會替ノ配ヲ密ニトナリ清水  
寺ハ興福寺、末寺ナレ故ニテフ有ケル清水寺法所

延慶本平家物語

延慶本平家物語 (松井簡治氏藏)

平家物語の傳本は現存してゐるものがかなり多くあるが、鎌倉時代の面影を傳へてしかも年代の明らかなものは延慶本があるだけである。しかもこれはその奥書によつて延慶二年乃至三年に書寫されたものを更に應永二十六、七年間に根來寺の權僧都<sup>有淳</sup>が書寫し、それを更に文政十三年八月に寫成したものである。

寫眞は清水炎上の條である。流布本と多少の異同がある。

趙高 秦の侯臣。  
王莽 漢の逆臣。  
周伊 未詳或は朱异の誤か。  
祿山 安祿山のこと、唐の逆臣。  
承平・天慶 朱雀天皇の年號  
康和 堀川天皇の年號  
平治 二條天皇の年號  
平氏各系  
桓武天皇―高祖  
親王―高祖  
高望王―國香  
貞盛―細衛  
正度

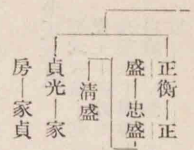
祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現はす。驕れる者久しからず、只春の夜の夢の如し。猛き人も遂には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらふに、秦の趙高漢の王莽梁の周伊唐の祿山、これ等は皆舊主先皇の政にも從はず、樂を極め諫をも思ひ入れず、天下の亂れむことも悟らずして、民間の憂ふる所を知らざりしかば、久しからずして亡びにし者どもなり。近く本朝を窺ふに、承平の將門・天慶の純友、康和の義親・平治の信賴、これ等は驕れることも猛き心も、皆とりどりなりしかども、間近くは、六波羅の入道前の太政大臣平朝臣清盛公と申しし人の有様、傳へ承るこそ心も言葉も及ばれぬ。

その先祖を尋ねれば、桓武天皇第五の皇子一品式部卿葛原親王九代の後胤讚岐守正盛が孫、刑部卿忠盛朝臣の嫡男なり。かの親王の御子高祖王、無位無官にして失せ給ひぬ。その御子高望王の

時、始めて平の姓を賜うて、上總介となり給ひしより以來、忽に王氏を出でて人臣に連る。その子鎮守府將軍良望、後には國香と改む。國香より正盛に至るまで六代は諸國の受領たりしかども、殿上の仙籍をばいまだ許されず。

足摺の事

さる程に鬼界島の流人共の召し還さるべき事定りしかば、入道相國の赦文書いてぞたうでげる。御使既に都をたつ。宰相餘りの嬉しさに、御使に私の使を添へて下されける。夜を晝にして急ぎ下れとありしかども、心に任せぬ海路なれば、浪風を凌いでゆく程に、都をば七月下旬に出でたれども、長月二十日頃にぞ鬼界島には著きにける。御使は丹左衛門尉基康といふ者なり。急ぎ船より上り、「これに都より流され給ひたりし平判官康頼入道丹波少



鬼界島 硫黄島のこと、大隅國大島郡に屬する。宰相 參議平教盛のこゝとで、成經の舅に當る。

波旬 天魔に同じ。

中宮 建禮門院平德子

將殿やおはす」と聲々にぞたづねける。

二人の人々は例の熊野詣してなかりけり。俊寛一人ありけるが、之を聞きて、餘りに思へば夢やらむ。又天魔波旬の、我が心を誑さむとていふやらむ。現とも更に覺えぬものかなとてあわてふためき、走るともなく倒るゝともなく、急ぎ御使の前に行き向つて、「これこそ流されたる俊寛よ」と名乗り給へば、雑色が頸に懸けさせたる布袋より、入道相國の赦文を取り出で奉る。これをあけて見給ふに、「重科は遠流に免ず。早く歸洛の思をなすべし。今度中宮御産の御祈によりて、非常の赦行はる。然る間鬼界島の流人、少將成經、康頼法師赦免」とばかり書かれて、俊寛といふ文字はなし。禮紙にぞあらむとて、禮紙を見るにも見えず。奥より端へ読み、端より奥へ読みけれども、二人とばかり書かれて、三人とは書かれず。さる程に少將や、康頼法師も出てきたり、少將の取つて見

るにも、康頼法師が讀みけるにも、二人とばかり書かれて、三人とは書かれざりけり。夢にこそかゝることはあれ、夢かと思ひなむとすれば現なり。現かと思へば、又夢の如し。その上、二人の人々の許へは都より言傳てたる文ども幾らもありけれども、俊寛僧都の許へは事問ふ文一つもなし。されば我が縁ゆかりの者どもは、皆都の内に跡を止めずなりにけるよと、思ひ遣るにも覺束なし。

「抑も我等三人は、同じ罪配所も同じ所なり。いかなれば赦免の時二人は召し還されて、一人爰に残すべき。平家の思ひ忘れかや、執筆のあやまりか。こは如何したる事どもぞや」と天に仰ぎ地に伏して、泣き悲しめどもかひぞなき。僧都、少將の袂にすがり、俊寛がかやうになるといふも、御邊の父、故大納言殿のよしなき謀叛の故なり。されば外の事と思ひ給ふべからず。赦されなければ、都までこそ叶はずとも、せめてはこの船に乗せて、九國の地まで

故大納言  
藤原成親。

著けて給べ。各これにおはしつる程こそ、春は燕、秋は田の面の雁の音づるゝやうに、おのづから故郷の事をも傳へ聞きつれ。今より後は何としてか聞くべき」とて悶え焦れ給ひけり。

少將、「誠にさこそは思しめされ候ふらめ。我等が召し還さるる嬉しさも、さる事にては候へども、御有様を見奉るに、更に行くべき空も覺え候はず。この船に打ち乗せ奉つて上りたくは候へども、都の御使、如何にも叶ふまじき由を頻に申す。その上、赦されもなきに、三人ながら島の内を出でたりなど聞え候はゞ、なか／＼悪しう候ひなむず。成經まづ罷り上つて、人々にもよく／＼申し合せ、入道相國の氣色をも伺ひ、迎に人を奉らむ。その程は日頃おはしつるやうに思ひなして待ち給へ。命はいかにも大切のことなれば、たとひこの瀬にこそ洩れさせ給ふとも、終にはなどか赦免なくて候ふべき」とさま／＼に慰め宣へども、僧都堪へ忍ぶべうも

法華經 八卷、姚秦の世鳩摩羅什譯、一部二十八品より成る。前十四品を述門とし後十四品を本門とする。

見え給はず。

さるほどに船出ださむとしければ、僧都船に乗つては下りつ下りては乗りつ、あらまし事をぞし給ひける。少將の形見には夜の衾、康頼入道が形見には一部の法華經をぞ止めける。既に纜解いて船押し出だせば、僧都綱に取りつき、腰になり、脇になり、丈の立つまでは引かれて出づ。丈も及ばずなりければ、僧都船に取りつき、「さて各、俊寛をば終に捨て果て給ふか。日頃の情も、今は何ならず。ゆるされなければ、都までこそ叶はずとも、せめてこの船に乗せて九國の地まで」と口説かれけれども、都の御使、「如何にも叶ひ候ふまじ」とて、取り付き給ひつる手を引きのけて、船をば終に漕ぎ出だす。

僧都せむ方なさに渚に上り倒れ伏し、稚きものゝ乳母や母などを慕ふやうに足摺をして、「これ乗せて行け。具して行け」と宣

松浦小夜姫が云々

宣化天皇の御代大伴狭手彦が任那に赴かうとする時、その妻の小夜姫が、これを慕つて領巾をふつたといふ故事。

壯里息里云々

壯里息里の兄弟が繼母に欺かれて絶海の孤島に捨てられたことが、淨土本縁經に見えてゐる。

ひをめき叫び給へども、漕ぎ行く船の習ひにて、跡は白波ばかりなり。未だ遠からぬ船なれども、涙に暮れて見えざりければ、僧都高き所に走り上り、沖の方をぞ招きける。かの松浦小夜姫が唐船を慕ひつゝ、領巾振りけむも、これには過ぎじとぞ見えし。さる程に船も漕ぎ隠れ、日も暮るれども、僧都あやしの臥處へも歸らず、波に足打ち洗はせ、露に萎れて、その夜は其處に明しける。さりとも少將は情深き人なれば、よき様に申す事もやと、たのみを懸けてその瀬に身をも投げざりし、心の中こそはかなけれ。昔壯里息里が海巖山へ放たれたりけむ悲しみも、今こそ思ひ知られけれ。

第三節 源平盛衰記

四十八卷。取扱つた材料は平家物語とほぼ同じであるが、平家物語は琵琶に合して謠はれたものであるから、流麗な文

章であるのに比して、これは主として讀むためにつくられたものであるのか敘述に精細な點があり、記事の委細をつくしたところに特色がある。しかし文學的價值からは平家物語に一步を譲らなければならぬ。

## 赦免書

六波羅の使近付き寄りて、是は丹左衛門尉基安と申す者に侍る。六波羅殿より赦免の御教書候ふ。丹波少將殿に進上せんと云ふ。人々餘りの嬉しさに、只夢の心地ぞせられける。成經是に侍りて出で合はれたり。基安立文二通取り出しまゐらす。一通は平宰相の私の消息なり。少將ばかり之を見る。一通は太政入道の免狀なり。判官入道之を披き讀むにいはく。

中宮御産の御祈禱に依て非常の大赦行はるゝの内、薩摩方疏

黄島の流人丹波少將成經並に平判官康頼法師歸洛すべきの由、御氣色候所なり。仍て執達件の如し。

七月三日

とはありけれども、俊寛僧都といふ四の文字こそなかりけれ。執行は御教書とりあげて、ひろげつ巻きつ、巻きつ披いつ、千度百度しけれども、かゝねばなじかは有るべきなれば、やがて伏し倒れ、絶え入りけるこそ無慙なれ。やゝありて起きあがりては、血の涙をぞ流しける。血の涙と申すは、涙くだりて聲なき血を云ふといへり。言はいださざりけれども、落つる涙は泉の如し。理やいかでかなからざらん。三人同罪にて同島へ流されたるに、死なば、一所に死に還らば同じく歸るべきに、二人は召しかへされて僧都一人留るべしとは思ひやはよりける。誠に悲しくぞ思ひけん。

## 第四節 太平記

四十卷。作者未詳。花園天皇の文保二年から後村上天皇の正平二十二年までの記事で、後醍醐天皇の北條氏追討の軍を起され一旦は隱岐に御遷幸になるが、やがて忠臣が出て建武中興となつた。しかし足利尊氏の叛亂のため再び都を出御、遂に吉野の地に崩御遊され忠臣相繼いで陣歿し、吉野朝の勢威の衰へていく様を敘したものである。文章は漢文の語句等を多く引用し、華麗ではあるが率直な力に乏しい。

## 主上御夢事附補事

元弘元年八月廿七日主上笠置へ臨幸成つて、本堂を皇居となさる。始め一兩日の程は武威に恐れて参り仕ふる人一人も無かり

主上  
後醍醐天皇。

けるが、叡山東坂本の合戦に六波羅勢打負けぬと聞えければ、當寺の衆徒を始めて、近國の兵共此處彼處より馳せ参る。されども未だ名ある武士手勢百騎とも二百騎とも打たせたる大名は一人も参らず。此の勢計りにては皇居の警固如何有るべからんと、主上思召し煩はせ給ひて、少し御まどろみ有りける御夢に、所は紫宸殿の庭前と覺えたる地に大なる常葉木あり。緑の陰茂りて、南へ指したる枝、殊に榮え蔓れり。其の下に三公百官位に依つて列坐す。南へ向きたる上座に御座の疊を高く敷き未だ坐したる人はなし。主上御夢心地に誰を設けん爲の座席やらんと、怪しく思召して、立たせ給ひたる處に、鬢結うたる童子二人忽然として來つて、主上の御前に跪き泪を袖にかけて、一天下の間に暫くも御身を隠さるべき所なし。但しあの樹のかげに南へ向かへる座席あり。是れ御爲に設けたる玉座にて候へば暫く此に御座候へと申して、童子は

玉座—玉座



遙かの天に上り去りぬ。と御覽じて、御夢はやがて覺めにけり。主上是は天の朕に告ぐる所の夢なりと思召して、文字に附けて御料簡あるに、木に南と書きたるは楠と云ふ字なり。其の陰に南に向うて坐せよと二人の童子の教へつるは、朕再び南面の徳を治めて、天下の士を朝せしめんずる處を、日光月光の示されけるよと、自ら御夢を合はせられて、たのもしくこそ思召されけれ。夜明けければ、當寺の衆徒成就房律師を召され、若し此の邊に楠と云はるゝ武士や有ると御尋ね有りければ、近き傍に左様の名字附けたる者ありとも未だ承り及ばず候ふ。河内國金剛山の西にこそ、楠多門兵衛正成とて、弓矢取つて名を得たる者は候なれ。是は敏達天皇四代の孫、井手左大臣橘諸兄公の後胤たりといへども、民間に下つて年久し。其の母若かりし時、志貴の毘沙門に百日詣て夢想を感じて設けたる子にて候ふとて、稚名を多門とは申し候ふなり。と

ぞ、答へ申しける。主上さては今夜の夢の告是なりと思召して、やがて是を召せと仰せ下されければ、藤房卿勅を承りて、急ぎ楠正成をぞ召されける。

勅使宣旨を帶して楠が館へ行き向うて、事の仔細をのべられければ、正成弓矢取る身の面目、何事か是に過ぎじと思ひければ、是非の思案にも及ばず、先づ忍びて笠置へぞ參じける。主上萬里小路中納言藤房卿を以て仰せられけるは、東夷征罰の事、正成をたのみ思召さるゝ仔細有つて勅使を立てらるゝ處に、時刻を移さず馳せ參る條、叡感淺からざる處なり。抑、天下草創の事、如何なる謀を廻らしてか、勝事を一時に決して、太平を四海に致さるべき。所存を殘さず申すべし。と勅詔ありければ、正成畏つて申しけるは、東夷近日の大逆、唯天の譴を招き候ふ上は、衰亂のつひえに乗つて、天誅を致されんに何の仔細か候ふべき。但、天下草創の功は、武略と智

謀との二つにて候ふ。若し勢を合せて戦はゞ、六十餘州の兵を集めて武藏相模の兩國に對すとも勝つことを得がたし。若し謀を以て争はば、東夷の武力唯利を擢き堅を破る内を出でず。是れ欺くに易うして、恐るゝに足らざる所なり。合戦の習にて候へば、一旦の勝負をば、必ずしも御覽ぜらるゝべからず。正成一人未だ生きてありと聞召され候はば、聖運遂に開かるべしと思召され候へと頼もしげに申して、正成は河内に歸りにけり。

第五節 増

鏡

二十卷。作者は諸説あつて一定してゐない。後鳥羽天皇の御即位から後醍醐天皇の隱岐よりの還幸まで、凡そ百五十年間の事蹟を敘したもので、體裁は大鏡にならつて作られたものであるが、大鏡が紀傳體であるに比し、これは編年體であ

嵯峨の清涼寺  
京都市右京區上  
嵯峨にある寺。

る。文章は流麗典雅であるが力がやゝ弱い。

序

如月の中の五日は鶴の林に薪盡きにし日なれば、かの如來二傳の御かたみのむつまじさに、嵯峨の清涼寺にまうでて、「常在靈鷲山」など心のうちに唱へて拜み奉る。傍に八十にもや餘りぬらんと見ゆる尼一人、鳩の杖にかゝりて參れり。とばかりありて、「たけく思ひたちつれど、いと腰いたくて堪へ難し。今宵はこの局にうちやすみなん。坊へ行きてみあかしのことなどいへ」とて具したる若き女房のつきくしき程なるをばかへしぬめり。

「釋迦牟尼佛」とたびく申して、夕日のはなやかにさし入りたるをうち見やりて、「あはれにも山の端近く傾きぬめる日影かな。わが身の上の心ちこそすれ」とてよりゐたるけしき、何となくな

まめかしく、心あらんかしと見ゆれば、近くよりて、「いづくよりまうて給へるぞ。ありつる人のかへり來んほど御伽せんはいかど」などいへば、「このわたり近く侍れど、年のつもりにや、いと遙けき心ちし侍る。あはれになん」といふ。「さてもいくつにかなり給ふらん」と問へば、「いさ、よくも我ながら思ひ給へわかぬ程になん。百とせにもこよなく餘り侍りぬらん。來し方ゆく先ためしもありがたかりし世のさわぎにも、この御寺ばかりはつつがなくおはします。なほやんごとなき如來の御光なりかし」などいふも、古代にみやびかなり。

年の程など聞くもめづらしき心ちして、かゝる人こそ昔物語もすなれと思ひ出でられて、まめやかに語らひつゝ、「昔の事の聞かまほしきままに、年のつもりたらん人もがなと思ひたまふるに、嬉しきわざかな。すこしのたまはせよ。おのづから古き歌など書

雲林院

今の京都市上京區紫野、舟岡の東に在った。

翁

世繼の翁といふ、翁の言の葉は大鏡をさして云ふ。

つくもがみの物

今鏡をいふ、其の序に「祖父は……名は世繼と申しき……つくも髪はまだおろし侍らねど……いかどうきたる事は申さん云々」とある。つくもがみとは、老母の白髪をいふ。

きおきたるもの、片はし見るだに、その世にあへる心地するぞかし」といへば、すげみたる口うちほゝゑみて、「いかでかきこえん。若かりし世に見聞き侍りしことは、こゝらの年頃に、ぬばたまの夢ばかりだになくおぼほれて、何のわきまへか侍らん」とはいひながら、けしうはあらず、あへなんと思へるけしきなれば、いよくいひはやして、「かの雲林院の菩提講に参りあへりし翁の言の葉をこそ、假名の日本紀にはすめれ。またかの世繼がうまごとかいひしつくもがみの物語も、人のもてあつかひぐさになれるは、御有様のやうなる人にこそ侍りけめ。なほのたまへ」などすかせば、さは心うべかめれど、いよく口すげみがちにて、「そのかみは、げに人の齢も高く、氣も強かりければ、それにしたがひて、魂も明かにてや、しかきこえつくしけん。あさましき身は、いたづらなる年のみつもれるばかりにて、昨日今日といふばかりの事をだに目も耳も

水鏡 神武天皇より仁  
明天皇嘉祚三年  
迄の假名歴史、  
中山内大臣忠親  
の作と稱せら  
る。  
世繼 榮華物語のこと  
で四十帖ある。  
今鏡 一名續世繼、作  
者については、  
或は水鏡と同じ  
人であるといひ  
或は源内大臣通  
親であるとい  
ふ。  
いや世繼 今傳はらない。  
藤原隆信朝臣  
藤原隆信、氏は  
法性寺と云ふ。  
爲隆の子、元久  
二年歿、年六十  
四。

おぼろになりて侍れば、ましていと怪しき僻事どもにこそは侍ら  
め。そもさやうに御覽じ集めけるふるとどもはいかにぞ」と  
いふ。「いさ、たゞおろく見及びしものどもは、水鏡といふにや、  
神武天皇の御代より、いとあらゝかにしるせり。その次には大鏡  
文徳のいにしへより後一條の帝まで侍りしにや。又、世繼とか四  
十帖の草紙にぞ延喜より堀河の先帝までは少しこまやかなる。  
又、なにがしのおとゞのかき給へると聞き侍りし今鏡には、後一條  
より高倉院までありしなめり。まことや、いや世繼は隆信朝臣の、  
後鳥羽院の御位の御程までをしるしたりとぞ見え侍りし。その  
後のことなん、いとおぼつかなくなりける。覚え給へらん所々  
にてもものたまへ。今宵たれも御伽せん。かゝる人にあひ奉れる  
も然るべき御契あらんものぞ」などかたらへば、「そのかみの事  
はいみじうたどたどしけれど、まことに事の續きをきこえざらん

もおぼつかなかるべければ、たえくゝに少しなん。僻事ども多か  
らんかし。そはさし直し給へ。いとかたはらいたきわざにも侍  
るべきかな。かのふるき事どもにはなぞらへ給ふまじうなん」と  
とて、

おろかなる心や見えんます鏡ふるき姿にたちはお  
よばで

とわなゝかし出でたるもにくからず、いとこだいなり。

「されば今のたまはん事をも、また書きしるして、かの昔の面影に  
ひとしからんとこそはおぼすめれ」といらへて、

今もまた昔をかけばます鏡ふりぬる代々のあとに  
かさねん

第六節 方丈記

鴨長明の著である。長明は加茂神社の神官の家に生れたが、世の轉變のはかなさと、自己の不遇をなげく心とから遂に世を遁れたやうである。人生の無常、天變地異の悲惨な有様、自己の隱遁生活等を記し、無常觀を中心とした當時の思想を代表した作品といへる。

發

端

行く川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなし。世の中にある人とすみかと、またかくの如し。玉しきの都の中に、棟を並べ、蔓を争へる、尊き卑しき人のすみひは、代々を経てつきせぬものなれど、これをまことかたとたづぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年やけて今年に造り、あるは大家ほろびて小家となる。

住む人もこれに同じ。ところもかはらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、わづかに一人二人なり。あしたに死に、ゆふべに生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、うまれ死ぬる人、いづ方より來りて、いづ方へか去る。又知らず、假の宿誰が爲に心を惱し、何によりてか目を喜ばしむる。そのあるじとすみかと無常を争ふさま、いはゞ朝顔の露に異らず。あるは露落ちて花残れり、残れりといへども朝日に枯れぬ。あるは花は萎みて露なほ消えず、消えずといへどもゆふべを待つことなし。

## 出家の動機

すべて世のありにくきこと、我が身とすみかとのはかなくあだなるさま、かくのごとし。いはんや、所により、身のほどに隨ひて、心をなやますことあげて數ふべからず。もしおのづから身數なら

權門のかたはら  
 云々  
 近<sub>二</sub>勢家<sub>一</sub>容<sub>二</sub>微  
 身<sub>一</sub>者<sub>一</sub> (中略)  
 有<sub>レ</sub>樂不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>大  
 開<sub>レ</sub>口而<sub>レ</sub>吟<sub>一</sub>、有<sub>レ</sub>  
 哀不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>高揚<sub>一</sub>  
 聲而<sub>レ</sub>哭<sub>一</sub>、進退有<sub>レ</sub>  
 懼、心<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>安、  
 譬猶<sub>二</sub>烏雀<sub>一</sub>近<sub>二</sub>鷹  
 鷂<sub>一</sub>矣、(本朝文  
 粹、慶滋保胤)

ずして權門のかたはらに居る者は、深くよろこぶことはあれども、大に樂しぶにあたはず。歎きある時も、こゑをあげて泣くことなし。進退やすからず、立居につけて恐れをのくさま、たとへば、雀の鷹の巢に近づけるが如し。もし貧しくして、富める家の隣に居るものは、朝夕すほき姿を恥ぢて、へつらひつゝ出て入る。妻子、僮僕の羨めるさまを見るにも、富める家の人のないがしろなるけしきを聞くにも、心念々に動きて、時として安からず。もし狭き地に居れば、近く炎上する時、その害をのがるゝことなし。もし邊地にあれば、往反わづらひ多く、盜賊の難はなはだし。又勢あるものは、貪欲ふかく、ひとり身なるものは人に輕しめらる。寶あれば恐れ多く、貧しければなげき切なり。人をたのめば、身他の奴となり、人をはごくめば、心恩愛につかはる。世に従へば、身くるし。又従はねば、狂へるに似たり。いづれのところを占め、いかなる業をして

人をたのめば  
 有<sub>レ</sub>人者果<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>  
 有<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>人者愛<sub>レ</sub>  
 (莊子)

か、しばしもこの身をやどし、たまゆらも心を慰むべき。

わが身、父方の祖母の家を傳へて、久しく彼の所にすむ。その後、縁かけ、身おとろへて、偲ぶかたしくしげかりしかど、つひにあととむることを得ずして、三十餘にして、更に我が心と一つの庵を結ぶ。これをありしすまひになずらふるに、十分が一なり。たゞ居屋ばかりを構へてはかゝしくは屋を造るに及ばず。わづかについちをつけりといへども、門建つるにたづきなし。竹を柱として、車やどりとせり。雪ふり、風ふく毎に、危からずしもあらず。所は川原ちかければ、水の難もふかく、白浪の恐れもさわがし。すべてあらぬ世を念じ、過ぐしつゝ、心をなやませる事は、三十餘年なり。その間折々のたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。すなはち、五十の春を迎へて、家を出て世をそむけり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執を

大原山  
京都府乙訓郡。

とゞめむ。空しく大原山の雲に、いくそばくの春秋をかへぬる。

第七節 徒然草

兼好法師の隨筆である。兼好は卜部兼顯の第四子で、吉田に住んでゐたので吉田兼好ともいふ。後宇多天皇の御代に左兵衛尉となつたが、その崩御にあひ哀悼の極、出家した。洛西双丘に住んだともいふが、晩年伊賀國見山の麓に住み、後村上天皇の正平五年入寂した。和歌にも秀れて當時四天王の隨一といはれてゐた。徒然草は見聞するに従つて心に感じたことを其の折々に記録した隨筆で、或は老儒佛の思想を受けて人世觀を述べ、或は風月を觀賞し、文藝を論じ、公事有職を説く。文章暢達麗雅。枕冊子とならんで隨筆文學中の優秀なものである。

四天王  
頓阿、淨辨、慶運、兼好。

つれづれなるまゝに

つれづれなる儘に、日暮し硯に對ひて、心にうつり行く由無しごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。

花は盛りに

花は盛りに、月は隈なきをのみ見る物かは。雨に對ひて月を戀ひ、たれこめて春の行方しらぬも、猶あはれに情ふかし。咲きぬべき程の梢、散りしをれたる庭などこそ、見所おほけれ。歌のことばがきにも、「花見に罷れりけるに、早く散りすぎにければ」とも、「さはる事ありてまからで」なども書けるは、「花を見て」といへるに劣れる事かは。花の散り月のかたぶくを慕ふならひはさる事なれど、殊にかたくななる人ぞ、「此の枝かの枝ちりにけり、今は

千里の外  
三五夜中新月  
色、二千里外故  
人心。(白氏文  
集)

見所なし」などは云ふめる。萬の事も始終こそをかしけれ。望月の隈なきを千里の外まで眺めたるよりも、曉ちかくなりて待ちいでたるが、いと心ふかう、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間のかげうちしぐれたるむら雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴しらかしなどの濡れたるやうなる葉のうへに、きらめきたるこそ身にしみて、心あらん友もがなと都こひしうおぼゆれ。すべて月花をば、さのみ目にて見る物かは。春は家を立ちさらでも、月の夜は閨のうちながらも思へるこそ、いと頼もしうをかしかれ。

よき人はひとへにすけるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもとにはねぢより立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、

祭  
賀茂の葵祭四月  
中の酉の日に行  
はれた。

はては大きな枝、心無く折りとりぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおりたちて跡つけなど、萬の物よそながら見る事なし。

さやうの人の祭見しさま、いと珍らかなりき。「見ごといと遅し。その程は棧敷不用なり」とて、奥なる屋にて酒飲み物食ひ、圍碁双六など遊びて、棧敷には人を置きたれば、「渡りさぶらふ」と云ふ時に、おの／＼肝つぶるゝやうに争ひ走り登りて、落ちぬべきまで簾はりいでて、押し合ひつゝ、一事も見漏らさじとまもりて、「とありかゝり」と物ごとに云ひて、渡り過ぎぬれば、「又わたらんまで」と云ひておりぬ。たゞ物をのみ見んとするなるべし。

都の人のゆゝしげなるは、ねぶりていとも見ず。わかくすゑずゑなるは、宮づかへにたちゐ、人のうしろにさぶらふは、さまあしくもおよびかゝらず。わりなく見んとする人もなし。

何となく葵かけわたしてなまめかしきに、明け放れぬほど、忍び



て寄する車どものゆかしきを、それか、かれかなど思ひよすれば牛  
かひ下部などの見しれるもあり。をかしくもきら／＼しくも、さ  
ま／＼に行きかふ。見るもつれ／＼ならず。くるゝほどには、た  
てならべつる車ども、所なく並みあつる人も何方へ行きつらん、ほ  
どなく稀になりて、車どものらうがはしさもすみぬれば、簾疊も取  
りはらひ、目の前にさびしげになり行くこそ、世のためしも思ひ知  
あれて哀なれ。大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。

第八節 謡曲

謡曲は能樂の詞曲である。古來神前で演じた滑稽な猿樂  
が、鎌倉時代に盛になつた田樂の趣向を取入れ、その他當時の  
歌舞の類を巧に包含して、遂に猿樂の能即ち今の能樂に大成  
したのである。その文章は概ね前代文學の美辭麗句を補綴

觀阿彌 結崎清次。  
世阿彌 結崎元清。  
四座一流 觀世・實生・金剛・今春を四座  
喜多を一流といふ。最近觀世よ  
り梅若が分れて一派を立てた。

白樂天 名は居易、盛唐の詩人。

したものであるが、莊重な漢文調と典雅な國文調とがうまく  
調和してゐる。作者も作られた時代も分明には言はれない  
が、室町時代から近世の初め頃までに多くの人の手になつた  
ものであらうが、中に觀阿彌、世阿彌父子の手になつたもの、或  
はその手を加へたもの、かなり多いやうである。現存して  
ゐるものをすべて合せると、名前のみのも加へて、千近くはあ  
らうが、普通行はれてゐるものは内外二百番である。觀世・實  
生・金剛・今春・喜多・梅若等の諸流に分れ、曲節詞章に多少の相違  
がある。

白樂天

元清作

ワキ、カ、ル、そも／＼これは唐の太子の賓客白樂天とは我が事なり。  
詞扱てもこれより東に當つて國あり。名を日本と名づく。急ぎ

前シテ  
漁翁。  
前ワキ  
白樂天。  
ツレ  
漁夫。  
後シテ  
住吉明神  
後ワキ  
白樂天。

彼の土に渡り、日本の智恵を計れとの宣旨に任せ、唯今海路に赴き候。次第舟漕ぎ出でて日の本のく、そなたの國を尋ねん。道行東海の波路遙かに行く舟のく、跡に入日の影残る。雲の旗手の天つ空、月また出づる其方より、山見え初めて程もなく、日本の地にも著きにけり。く。詞海路を経て急ぎ候ふ程に、これははや日本の地に著きて候。暫くこの所に碇をおろし、日本のやうを詠めばやと存じ候。

シテ、ツレ、一聲「不知火の筑紫の海の朝ぼらけ、月のみのこるけしきかな。シテ、サシ「巨水漫々として碧浪天を浸し、シテ、ツレ「越を辭せし范蠡が、扁舟に棹をうつすなる五湖の煙の波の上、斯くやとおもひ知られたり。あら面白の海上やな。下歌「松浦瀉、西に山無き有明の、上歌「月の入る、雲も浮ぶや沖つ舟、く、互にかゝる朝まだき、海は其方か、唐の船路の旅も遠からで、一夜泊と聞くからに、月も程なき名残

かな。く。

ワキ、詞「われ萬里の波濤を凌ぎ、日本の地にも著きぬ。これに小船一艘浮べり。見れば漁翁なり。如何に、あれなるは日本の者か。シテ「さん候。「これは日本の漁翁にて候。御身は唐の白樂天にてましますな。ワキ「不思議や。始めてこの土に渡りたるを、白樂天と見る事は。何の故にて有るやらん。ツレ「其の身は漢土の人なれども、名は先立つて日本に聞ゆ。隠れなければ申すなり。ワキ「たとひ其の名は聞ゆるとも、それぞとやがて見知る事あるべき事とも思はず。シテ、ツレ「日本の智恵を計らんとて、樂天來り給ふべきとの聞えは普き日の本に、西を眺めて沖の方より、船だに見ゆれば人毎に、すはやそれぞと心づくしに、歌、地「今やく、と松浦舟。く。沖より見えて隠れなき、唐舟の唐人を、樂天と見る事は、何か空目なるべき。むつかしや、言さやぐ唐人なれば御詞をも、とても聞きも知ら

天竺の靈文  
陀羅尼のこと。

青苔云々  
後中書王文藻の  
詩に曰く、「白雲  
似帶圍山腰、  
青苔如衣負巖  
背云々」

苔衣云々

ばこそ。あらよしな釣竿の暇をしや、釣垂れん。くく。ワキ、詞なほ  
く、尋ねべき事あり。舟を近づけ候へ。如何に漁翁。扱てこの  
頃日本には何事を翫ぶぞ。シテ扱て唐土には何事を翫び給ひ候ふ  
ぞ。ワキ、唐には詩を作つて遊ぶよ。シテ、詞、日本には歌を詠みて人の  
心を慰め候。ワキ、そも歌とは如何に。シテ、それ天竺の靈文を唐土の  
詩賦とし、唐土の詩賦を以て我が朝の歌とす。然れば三國を和ら  
げ來るを以て、大きに和ぐと書いて大和歌と讀めり。知ろし召さ  
れて候へども、翁が心を御覽ぜんため候ふな。ワキ、いや其の儀にて  
はなし。いでさらば目前の氣色を詩に作つて聞かせう。青苔衣  
を負ひて巖の肩にかゝり、白雲帶に似て山の腰をめぐる。心得た  
るか漁翁。シテ、青苔とは青き苔の巖の肩にかゝれるが、衣に似たる  
とかや。白雲帶に似て山の腰をめぐる。おもしろしく。日本  
の歌もたゞこれ候ふよ。苔衣著たる巖はさもなく、衣著ぬ山の

苔衣著たるいは  
ほは寒からで衣  
著ぬ山に帶をす  
るかな。(日本  
風土記)

生きとし生ける  
もの云々  
花に鳴く鶯水に  
住む蛙の聲を聞  
けば、生きとし  
生けるもの、何  
れか歌をよまざ  
りける。(古今集  
序)

しきねん  
或年を式年と讀  
誤りしものか。

帯をするかな。ワキ、不思議やな、其の身は賤しき漁翁なるが、斯く心  
ある詠歌を連ぬる。其の身は如何なる人やらん。シテ、人がましや  
な、名もなき者なり。然れども歌を讀む事は、人間のみに限るべか  
らず、生きとし生けるもの毎に、歌をよまぬは無きものを。ワキ、そも  
や、生きとし生けるものとは、然ては鳥類畜類までも。シテ、和歌を詠  
ずるそのためし、ワキ、和國に於て、シテ、證歌多し。地、花に鳴く鶯、水  
に住める蛙まで、唐土は知らず日本には、歌をよみ候ふぞ。翁も大  
和歌をばかたの如くよむなり。地、ワキ、そもく、鶯の歌をよみたる  
證歌には、孝謙天皇の御宇かとよ。大和の國高天の寺に住む人の、  
しきねんの春の頃、軒端の梅に鶯の來りて鳴く聲を聞けば、初陽  
毎朝來。不遭還本栖。と鳴く。文字に寫しこれを見れば、三十一  
文字の詠歌の詞なりけり。シテ、初春のあした毎には來れども、地、あ  
はでぞ歸るもとのすみかに。と聞えつる。鶯の聲を始として、其

の外鳥類畜類の、人にたぐへて歌をよむためしは多く、荒磯海の濱の眞砂の數々に、生きとし生けるもの、何れも歌をよむなり。

ロンギ、地「實にや和國の風俗のく、心有りける海士人の、實に有難き習かな。シテ」とても和國の翫び、和歌を詠じて舞歌の曲、其のいろ

いろを顯はさん。地「そもや舞樂の遊びとは、其の役々は誰ならん。シテ」誰なくとも御覽ぜよ。われだにあらばこの舞樂の、地「鼓は

波の音、笛は龍の吟ずる聲、舞人はこの尉が、老の波の上に立つて、青海に浮びつゝ、海青樂を舞ふべしや。シテ」蘆原の、地「國も動かじ萬

代まで、………中入、………

後シテ「山影のうつるか水の青き海の、地「波の鼓の海青樂。シテ、ワ

西の海云々  
續古今集の歌。

キ「西の海あをきが原の波間より、地「顯はれ出でし住吉の神。住吉の神、住吉の、シテ」顯はれ出でし住吉の、地「住吉の、神の力のあらん程は、よも日本をば從へさせ給はじ。速に浦の波、立ち歸り給へ

海青樂

雅樂の曲名。

蘆原の云々

海青樂の歌句。

八りん  
八音(金、石、糸、竹、匏、土、革、木)の誤か。

樂天。地「住吉の現じ給へば、伊勢石清水賀茂春日鹿島三島諏訪熱田安藝の嚴島の明神は娑竭羅龍王の、第三の姫宮にて、海上に浮んで、海青樂を舞ひ給へば、八大龍王は八りんの曲を奏し、空海に翔りつゝ、舞ひ遊ぶ小忌衣の、手風神風に、吹きもどされて唐船は、ここより漢土に歸りけり。實に有難や神と君。實に有難や神と君が代の、動かぬ國ぞ久しき。く。

第九節 狂言

言

中古以來行はれて來た猿樂といふものは主に滑稽な所作をして興を添へるものであつたが、室町時代になると、猿樂の能、即ち能樂が發達するやうになつたため、本來の猿樂は却つて狂言となつて其の特質を發揮し整頓して來た。そして莊重嚴肅な能の間に挿まれて、滑稽諧謔を主眼とした狂言は觀

者の緊張し切つた精神を緩和し、兩々相錯綜し、以て一日の歡を盡さしめたのである。文章はすべて對話であつて、ほゞ當時の俗語のまゝ書かれてゐる。謠曲の文が古人の名句を集めて飾付けたのと大變な差である。取扱つた材料も謠曲は英雄豪傑の事蹟を多くとり、狂言は日常社會の小さな失策や喧嘩を取扱ふ。従つて前者は莊重典雅であり、後者は輕快通俗である。

附子

附子  
ブス。烏頭(ト  
リカブト)の汁  
を日に晒して製  
した毒藥。

三人

大 太郎冠者 長袴、小き刀  
次 太郎冠者 半袴、腰帶  
同 じ く

大名「このあたりの大名でござる。今日はさる方へ參る。太郎冠者を呼び出し、申し付ける事がある。太郎冠者あるか」  
太郎冠者は

念なう  
意外に。

滅却  
ほろびてしま  
ふ。死んでしま  
ふ。

やくたいもない  
らちもない。た

あ「大名、ゐたか」太郎「御前に」大名「念なう早かつた。次郎冠者も呼べ」  
太郎「畏つてござる。次郎冠者召すわ」次郎冠者「心得た。御前に」大名  
「汝等を呼び出すは別の事でない。今日はさる方へ行く。兩人共に留守をせい」冠者二人「畏つてござる」大名「それに待て」二人「はあ」大名  
「やい、このあなたに附子がある程に、さう心得」二人「それならば、兩人共にお供致しませう」大名「さうではない。このあなたにぶすと云うて、毒がある。この方から吹く風にあたつてさへ滅却する程に、さう心得」二人「畏つてござる」太郎「やい、次郎冠者今日のやうなおるすはあるまいぞ」次郎「お、く、そなたが供に行けば、みどもが留守をする。身共が供に行けば、そなたが留守をする。今日のやうな云ひあはせた留守はあるまいぞ。そりやあ」太郎「何事ぢや」次郎「ぶすの方から風が來た。こゝにてはなせ」太郎「みどもはあ、ぶすを見ようと思ふ」次郎「やくたいもないことを。おけ」太郎「あの

わいもない。

あけうほどに  
開けようから。

どつみり  
どんより。黒く  
ねばり氣のある  
形容。

領じられた  
みいられた。

方から吹く風があたらねば苦しうない。扇あふいでくれ」次郎「心得た」  
 太郎「扇げ〜」次郎「心得た。ぬかるな」太郎「ぬかる事ではない。さ  
 あ、紐は解いたぞ。さて、蓋をあけうほどに、扇げ」次郎「心得た」太郎「さ  
 て、蓋をあけたぞ。身共はあの附子を見て來う」次郎「一段とよから  
 う」太郎「やい〜見て來たわ」次郎「いか様なものぢや」太郎「なんぢや  
 は知らぬが、黒い物がどつみりとしてある。旨さうな物ぢやほど  
 に、みどもは食うて見よう」次郎「やくたいもない事を。おけ」太郎「み  
 どもはぶすに領じられたか、食ひたうてならぬ。行て食て來う」  
 次郎「みどもが居るからは、やる事はならぬ」太郎「名残の袖をふりき  
 りて、附子の側へぞあゆみゆく」太郎ぶすを食ふ「む〜」次郎「やい太郎冠者なん  
 とした」太郎「砂糖ぢや」次郎「なんぢや。砂糖ぢや」太郎「なか〜」次郎  
 「どれどれ」太郎「まづ食うてみよ」次郎「心得た。む〜まことに砂糖ぢ  
 や」太郎「これを食はすまいと思つて、ぶすぢやの、毒ぢやのおしや

頼うだお方の  
主人が。  
おくやつた  
お食ひなされ  
た。

牧溪  
宋の畫家。範無  
博の弟子。

大天目  
茶の湯に用ひる  
茶碗の一種。

つた」次郎「汝ばかり食うてよいものか」太郎「それならば、ちとやらう」  
 次郎「そのやうに取らずとも、ちつと取れ」二人「さて〜うまい事か  
 な」太郎「ほう、よい事めさつた。頼うだお方のぶすぢやの、毒ぢや  
 のとおしやつたに、皆おくやつたと、頼うだ御方のお歸りなされた  
 らば申上ぐる」次郎「みどもが、おけと云うたに開けた。某がまつす  
 ぐに、申し上ぐる」太郎「やい〜これはじやれ事ぢや。この言ひわ  
 けは、あの掛物を破ればよい」次郎「心得た。さらり〜」太郎「よい事  
 めさつた。あれは頼うだお方の、牧溪もくせい和尚の墨繪の觀音で、御祕藏  
 なされたものを、あの様にめさつた。お歸りなされたら、きつと申  
 し上ぐる」次郎「破れと云うたによつて、やぶつた。みどもが申し上  
 ぐる」太郎「やい〜、これもじやれ事ぢや」次郎「さて、この言ひわけど  
 もは、何とするぞ」太郎「この大天目を破れば、いひわけが立つ」次郎「い  
 かな〜、また迷惑をさせうで」太郎「身共も、手をかける。そちらを

ぐわらち・ちん  
陶器のわれる  
音。

かへしさに  
反動で。

下されたれども  
頂戴したけれ  
ど。

持て「次郎心得た」太郎「ぐわらり」次郎「ちん」太郎「さて、おかへりなされ  
たらば泣いて居よ」次郎「泣けばよいか」大名「只今罷り歸る。やいや  
いもどつたぞ」二人「なけく」大名「心許ないが何事ぢや」太郎「次郎冠  
者申し上げ」次郎「わごれ、申し上げさしませ」太郎「お留守を大事と存  
じて、次郎冠者と相撲をとりましてござれば、次郎冠者は手とりで  
ござり、私が小股をとつてこかしますを、こけまいと存じて、掛物に  
取付いたれば、あの様になりました」大名「これは如何なこと。あれ  
は、みどもが祕藏の観音を、あのやうにし居つた」次郎「かへしさに、天  
目の上へ投げられました、あのやうに微塵になりました」大名「これ  
は如何なこと。おのれを何としたものであらうぞ」太郎「かやうに  
大事の御道具を損ひまして、生けてはおかせられまいと存じて、附  
子を食べて死なうと存じて、下されたれども、まだ死にませぬ」大名  
「おのれ等今のまに滅却せうぞ」太郎「一口食へども、まだ死なず」次郎

「二口食へども、死なれもせず」太郎「三口四口」次郎「五口六くち」二人「十  
口あまり、皆になるまで食うたれども、死なれぬ命、めでたさよ。な  
んぼう」大名「やい、そこなやつ」次郎「はあ」太郎「これは何としたもので  
あらう」大名「まだおのれはそれに居る」二人「ゆるさつしやれく」大  
名「やるまいぞく」

## 第五章 近世の文學

我が文學史の中で最も光彩絢爛たるは平安朝と江戸時代で、この兩時代はその中間に鎌倉室町四百餘年の溪谷を隔て、相對してゐる高山の如き觀を成してゐる。平安朝は、たゞ貴族の文學であつたが、鎌倉室町の兩時代の間に漸次下流社會に及ぶ氣運が養はれ、江戸時代に入つては全く平民階級に普及し、國民一部分の文學でなく、國民一般の文學にまで發展して來た。江戸三百年間を通じて、その最も盛であつたのは前に元祿時代、後に文化文政時代があり、互に特色をもつて相對立してゐる。元祿時代は國學漢學より小説戯曲に至るまで、すべてみな京阪地方を中心として榮えてゐたのであつたが、文化文政の時代には中心は江戸に移り、あらゆる文學はこゝに妍麗を競つた。要するに近世文學は元祿を中心

とする前後約百五十年間の上方文學の時代と文化文政を中心とする約百年間の江戸文學の時代との二つに分けて考へることが出来る。

## 上、上方文學の時代

一 思想界の特色 當代に於ける著しい思想界の特色は儒教が佛教に代つて新にその勢力を占めたことである。現世を否定し淨土を欣求した薄暗い近古の世は、現實を謳歌し泰平に陶醉する花やかに亦明るい世界と變つた。各自家の宗教はもたねばならなかつたけれども、佛教はすでに人心の内部を支配する權威を失うて徒に形骸と化し、圓頂緇衣の徒にして新興の儒教に趨つたものもかなりあつた。殊に幕府の官學が朱子學であつた爲に、儒教はまさにその時を得て、修身齊家の現實主義が、深く文化の底に根



をはつたのである。

殊にこの儒教と手を携へて當代の人心を支配した思想は、武士道であつた。由來武士道は、われらが祖先の尊び來つた廉潔尙武の國民性に、仁義を本領とする儒教の精神を加へ、更に信仰を基として生死を度外に措く佛教の主旨を折衷し、之を戰亂に鍛へて成つたもので、それが當代に於て美しき實を結ぶに到つたものである。かくして凜々たる義理の精神、即ち獻身犠牲の尊むべく又可憐なる物語が、この時代の文學を飾つてゐるのである。けれども亦一面武事を偏重して殺伐に流れる弊を伴つたことも否定することは出来ぬ。

三 元祿時代前 徳川家康は馬上に天下を得た。然しながら亦到底馬上に於て天下を治め得るものでないことを知つてゐた。ここに於て彼の文教獎勵策が行はれた。戰國以來散逸した書籍を

蒐集し、印行し、藤原惺窩、林羅山等の學者を招いて經史を講ぜしめた。かくして寛永の頃に至つては、さしも衰頽を極めた文運も、漸く復興の氣運に向つたのである。その文運復興の第一聲は漢學であつた。しかもそれは鑑賞の爲の詩文ではなく、天下經綸の爲の儒學、殊に朱子學であつた。家康の爲に、律令制度を更定して大功を奏した羅山の後裔が、代々儒を以て幕府に仕へ、爲に朱子學は幕府の御用學として永く後年にかけてその權威を振つたのである。朱子學の外に行はれたものは陽明學である。この學は、近江聖人中江藤樹に因つて社會感化に生かさされ、その弟子熊澤蕃山に因つて政治の上に應用せられた。

和歌に於て戰國から當代への橋渡しをつとめたものは細川幽齋である。幽齋に學んだ公卿の數も少なくはないが、その歌道の中流以下に弘めた功は、地下の弟子松永貞徳に歸せねばならぬ。

細川幽齋  
名は藤孝、足利  
將軍、信長、秀  
吉に仕へ、後家  
康に召された。  
二條家歌學の正

統を傳へた人。  
 慶長一五(二二七〇)年薨。  
 松永貞徳  
 明心居士、逍遙軒、長頭丸等號が多い。和歌を九條直通、細川幽齋等に、連歌を里村紹巴に學ぶ。門下に羅山、元政、加藤盤齋、北村季吟、俳諧には野々口立圃、松江重頼等多士濟々である。

假名草紙  
 一、事實小説  
 史實に、多少の潤飾を加へたもの。信長記、太閤記の類。

一、宗教小説  
 佛教の功徳を説くもの。二人比丘尼、因果物語の類。  
 一、教訓小説  
 儒教に神道老莊等の思想を交へたもの。  
 可笑記、誰が身の上の類。  
 一、遍歴小説  
 名勝、風俗、人情等を小説風に示すもの。東海道名所記の類。  
 一、怪異小説  
 奇事異聞をのべたもの。お伽婢子の類。

貞徳の主功はしかしながら和歌よりもむしろ俳諧にある。彼は京の人俳諧の法式を定め、有力な多數の門人を育て、文藝の趣味を平民の社會に擴めた。彼は自らいふ、俳諧は、俳言を以て賦する連歌である、即ち、彼は詩想の上に俳諧を見ずして之を言語の上に見たのである。従つてその形式を外にしては、宗祇等の連歌とさしたる相違もない。この一派を世に古風といふ。之について、その天稟の奇才を以て、輕妙なる滑稽と、清新なる句法を以て一旗幟を樹てたものは西山宗因である。謂ゆる檀林風がそれで、一時は天下を風靡する概があつた。

要するにこの時代は、たゞ文運復興の先聲時代で、未だ旺盛と稱するまでには到らない。新作の假名草紙も、多くは室町期の御伽草紙に一步を進めたまでで、いづれも啓蒙思潮に棹すものである。  
 三、元祿時代 元和偃武より五十年、諸般の文化的施設が緒につい

た時代である。あらゆる方面に因襲打破が行はれ、個性の開放が叫ばれ、革新的機運の澎湃として昂進した時代である。

將軍綱吉は、漢學を好み、諸侯は競うて儒者を聘用する。朱子學には羅山の孫鳳岡、古學には伊藤仁齋、その子東涯、古文辭學に荻生徂徠、博通不偏の木下順菴、その門下に新井白石、室鳩巢、蔚然として大家が一時に輩出した。教育家としての貝原益軒、國語學の僧契沖、尊皇主義の水戸學、まことに盛觀と謂はねばならぬ。

以上は學界の傑物であるが、元祿の偉大なる點は、わが國の文藝に萬丈の氣を吐いた松尾芭蕉、井原西鶴、近松門左衛門の三者を産んだことである。

一、芭蕉の俳諧 芭蕉は伊賀の人、初め北村季吟に學び、後江戸に出て俳諧に一新紀元を開いた。

彼の理想は風雅の二字であつた。風雅とは外物に役せられず

して、天地自然に融合同化し、造化の機微に參ずるの謂である。かくして象徴せられた彼の俳諧は、雄渾にして莊大、幽玄にして閑寂、遂に高き藝術の殿堂を築き上げ、正風の俳諧を開いたのである。彼は清僧の如く恬淡寡欲であつたけれども、一面又極めて人情に厚く、社會的の儀禮を重んじた人である。その俳道を通じて完成した高貴なる人格と、感化力の偉大なる點は、日本文壇中特にその光輝を放つところのものである。

その門弟には俊秀の作家が多く、正風は檀林派に代つて天下を一統したのであるが、芭蕉の歿後は、各々その好むところに偏して終に統一を失するに到つた。

三 西鶴の浮世草紙 正風の俳諧は、貞門や檀林に較べて高雅な趣味の上に立つてゐるが爲に、その道の修業を積んだものでなければたやすくその味を解することが出来ぬ。こゝに於て一般

世人の趣味嗜好に投ずる文藝が生れなければならぬ。まして當代は、太平の惠澤漸く深く、文化は進展し、生活は向上し、三府の繁榮前古に比なく、殊に大阪は全國經濟の中心地として天下の金權を握り、幾多の豪富が輩出して驕奢を極めた時代である。しかも彼等町人の世界には、武士道や儒教の制裁も少ない、金に任せて本能の動くがまゝに活動する結果、風俗は勢ひ淫靡に流れざるを得ない。かうした社會をさながらに寫し出したものは、西鶴の浮世草紙である。彼はその驚くべき聯想と記憶の力を以て、現實の社會から得來つた豊富なる活材料を、極端に節約せられた文體の中に盛り込んで、輕妙奇拔、格法を超越し、創意に充ちた幾多の小説を發表したのである。

三 近松門左衛門の淨瑠璃 淨瑠璃は江戸開府以前既に行はれてゐたけれども、なほ未だ見るに足るものが少なかつた。元祿

に至つて近松門左衛門が出るに到つて、遂に之を不朽の藝術品に仕上げた。著はすところ百數十曲、その凡てが彼の博大なる愛の精神に包まれてゐる。現實を美化して、しかもよく人情の祕奥を穿ち、湧くが如きその才藻は、この種文體の頂點を示して、永く後人を酔はしめるのである。

以上元祿文學は、主として上方を中心とした文藝である。

### 第一節 松尾芭蕉

正保元年伊賀國上野に生れた。名は宗房。桃青と號した。初め藤堂家に仕へその若君良忠蟬吟公に近侍した。蟬吟公が寛文六年に歿したので辭し遁世した。時に年二十三。京に出で北村季吟の門に入つた。寛文十二年二十九才で江戸に出た。これより次第に俳諧に精進するやうになり、門弟子

芭蕉の生地  
栢植ともいふ。

も多くなり、一世の俳聖として、元祿七年十月十二日旅中大阪に歿した。奥州を始め生涯の大半を旅に過し、紀行文にも優れたものが多い。特に奥の細道は最も有名なものである。

### 銀河序

北陸道に行脚して、越後國出雲崎と云ふ處に泊る。かの佐渡が島は海の面十八里、滄波を隔てて、東西三十五里に横をり臥したり。峰の嶮難、谷の隈々まで、さすがに手に取るばかり鮮かに見渡さる。むべ、此の島は黄金多く出でて、遍く世の寶となれば、限りなきめでたき島にて侍るを、大罪朝敵のたぐひ、遠流せらるゝに由りて、唯恐しき名の聞えあるも本意無き事に思ひて、窓押開きて、暫時の旅愁を勞はらんとする程、日既に海に沈みて、月ほの暗く、銀河半天に掛りて星きら／＼と冴えたるに、沖の方より波の音しば／＼運びて、

魂削るが如く、腸ちぎれてそゞろに悲しび來れば、草の枕も定まらず、墨の袂何故とは無くて絞るばかりになん侍る。

荒海や佐渡に横たふ天の川

歳暮

初めの老  
初老 四十才をいふ。

代々の賢き人々も、古里は忘れ難きものに覺え侍る由。我今は初めの老も四年を過ぎて、何事につけても昔のなつかしきまゝにはらからのあまた齡傾きて侍るも見捨て難く、初冬の空の中時雨るゝ頃より、雪を重ね、霜を経て、師走の末伊陽の山中に至る。猶父母の在そかりせばと、慈愛の昔も悲しく、思ふ事のみあまた有りて、古さとや臍の緒に泣く年の暮

第二節 俳句抄(上)

貞徳

松永正秀の孫、古風の俳諧を唱へた。

貞徳

しをるゝは何かあんずの花の色  
冬籠蟲けらまでも穴かしこ

宗因

西山氏、大阪の人、延寶年間江戸に出て、談林派を創める。

宗因

郭公いかに鬼神もたしかに聞け  
世の中や蝶々とまれかくもあれ

來山

小西氏。享保元年歿、年六十三。

來山

涼しさに四橋四つ渡りけり  
わがねたを首あげて見る寒さ哉

鬼貫

上島氏、伊丹の人、元文三年歿、年七十八。

鬼貫

によつぼりと秋の空なる富士の山  
行水の捨所なし蟲の聲

芭蕉

山里は萬歳遅し梅の花  
 落ちざまに水こぼしけり花つばき  
 奈良七重七堂伽藍八重櫻  
 山路来て何やらゆかしすみれ草  
 五月雨の雲吹きおとせ大井川  
 清瀧や浪にちりこむ青松葉  
 象潟や雨に西施がねぶの花  
 うき我をさびしがらせよかんこ鳥  
 此の道やゆく人なしに秋のくれ

其角

寶井氏、芭蕉の高弟、江戸座を創む。

其角

夕立や家をめぐりて家鴨なく  
 此の木戸や錠のさゝれて冬の月

嵐雪  
服部氏、芭蕉の高弟雪中庵の祖

嵐雪

去來  
向井氏、芭蕉の高弟、嵯峨落柿舎に住む。

ぬれ縁になづなこぼるゝ土ながら  
 秋風の心動きぬ繩すだれ

去來

湖の水まさりけり五月雨  
 應々といへど叩くや雪の門

丈草

内藤氏、尾張犬山の人、芭蕉の高弟。

丈草

我事と泥鰯のにげし根芹かな  
 大原や蝶の出で舞ふおぼろ月

第三節 井原西鶴

西鶴の傳は今日餘り多く知られて居ない。寛永十九年に生れ、元祿六年五十二歳で歿したことは明である。西山宗因について談林風の俳諧をやつた。四十一歳の時初めて浮世

草紙に筆をそめ、遂に浮世草紙の作者とし大成した。その作品の重なるものは好色物町人物、武家物の三種である。好色物には一代男、一代女、五人女があり、町人物では日本永代藏胸算用があり、武家物では武道傳來記等がある。

## 茶の十徳も一度に皆

上米  
入港税  
運上  
税金

越前國敦賀の港は毎日の入舟、判金一枚ならしの上米ありといへり。淀の川舟の運上にかはらず。萬事の間丸、繁昌の所なり。殊更秋は立ちつゞく市の借屋、目前の京の町、男まじりの女尋常に、其の形氣北國の都ぞかし。旅芝居も爰を心がけ、巾着切も集れば、今時の人かしこく印籠ははじめからさげず、鼻紙袋も内懐に入れしは、手のとゞくことに非ず。この中にも錢を一文只はとられず、盗人仲間もむつかしの世や。兎角正直の頭をさげて、當座の且

那あひしらひに物買をまねき、商上手の者は世を渡りかねず。

町はづれに小橋の利助とて、妻子も持たず、口一つを其の日過ぎにして、才覺男、荷ひ荷屋しほらしく拵へ、其の身は玉だすきをあげて、くゞり袴利根に、烏帽子をかしげに被き、人より早く市町に出、ゑびすの朝茶といへば、商人の移り氣、咽のかわかぬ人までも、此の茶を呑みて、大かた十二文づつ投げ入れられ、日毎の仕合、程なく元手出來して、葉茶見世を手廣く、其の後はあまたの手代を抱へ、大問屋となれり。これまでは我が働きて分限になり、人のほめ草なびき、歴々の乞聲にも願ひしに、一萬兩より内にて女房をよばず、四十まではおそからずと、當分の物入を算用して、銀の溜るを慰みに淋しく年月を送りぬ。

それより道ならぬ悪心發りて、越中越後に若い者をつかはし、捨り行く茶の煮殻買ひ集め、京の染物に入る事と申しなし、吞茶にこ

れを入れまぜて、人知れずこれを商賣しければ、一度は利を得て家榮えしに、天これを咎め給ふにや、此の利助俄に亂心となりて、我と身の事を國中に觸れまはり、茶殻々々と口をたゞけば、俗はあの分限、さもしき心底なりと人の付合絶えて、藥師を呼べど行く人無く、おのづから次第弱りに湯水のかよひ絶えて、既に末期におもむき、我今生の思ひ晴らしに茶を一口と涙をこぼす。目に見せても咽に因果の關すわりて、息も引き入る時、内藏の金子取出させて跡や枕にならべ、わが死んだらば、此の金銀誰が物になるべし、思へば惜しや悲しやと、しがみ付き、涙に紅の筋引いて、顔つきはさながら角なき青鬼の如し。面影屋内を飛びめぐりて落入るを、押付くれば、よみがへして、銀を尋ぬること三十四五度に及べり。後には下々も愛想つきて物すどく、病家に行く人もなく、やうく臺所に大勢集り、棒乳切木を手毎に持ちて身用心をして、二三日も音のせぬ時、

あまた立ちかさなりて見しに、金銀に取付き眼を開きし有様、人皆魂無かりき。そのまゝ乗物におし込み、野墓に送りける。折ふし春の日の長閑なるに、俄に黒雲立ちまよひ、車軸平地に川を流し、風枯木の枝折りて、天火ひかり落ちて、利助がなきがらを煙になさぬ先に取りてや行きけん。明乗物ばかり残りて眼前に火宅のくるしみ、おのゝにげ歸りて皆菩提心にぞ成りにける。その後利助が跡に遠き親類を招きこれを渡すに、聞き傳へて身をふるはかし、箸をかたし取る人なし。下人共に配分して取れといへど、更に望なしとて、此の家にて仕着せの布子まで置いて出れば、欲でかためし人もおろかなる物ぞかし。せんかたなくて諸事賣拂ひ、残らず檀那寺にあげける。(日本永代藏卷四)

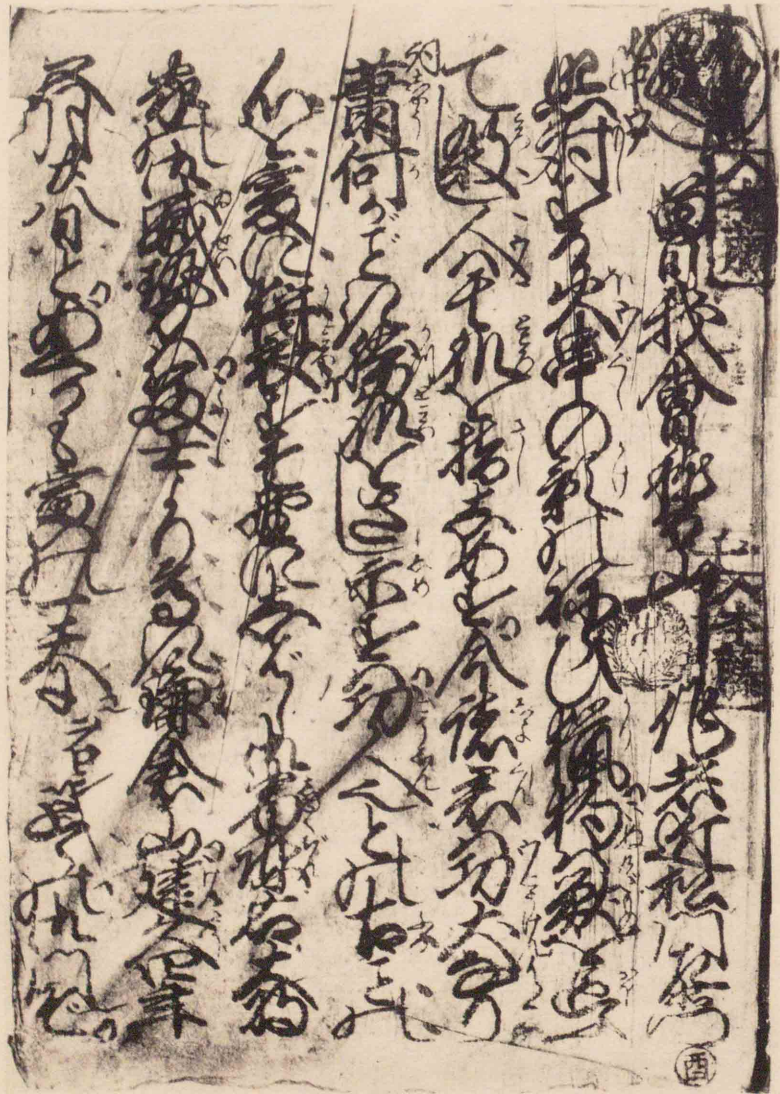


第四節 近松門左衛門

門左衛門の傳も不詳である。傳によると相森信盛といひ、生國は不明、一時京都で公卿奉公したといふ。享保九年七十二歳で歿してゐる。當時淨瑠璃のかたり手に竹本義太夫があり、義太夫節を完成した。この義太夫の爲に筆をとり、遂に近世文學者中の最も重要な地位を占めたのが、近松門左衛門である。作品として有名なものには、時代物では曾我會稽山、國姓爺合戦、傾城反魂香等あり、世話物では曾根崎心中、天の網島等がある。

曾我會稽山

源の蒲の御曹司範頼朝臣、天下の疑晴さんため、修善寺にて御出



山稽會我曾

曾我會稽山 作者 近松門左衛門

享保三年の刊本で七行九十三丁本の開卷第一頁を示したものである。

家あり。法名源雄と衣を墨に染めながら、鎌倉殿の御舎弟、世の覺え重けれども、身持は輕き駕籠乗物、只一僕を侍にも、草よ杖よ吳竹の藪醫に紛ふ風なり。大名小路の升形より、引馬に五つ道具、乗物の戸八文字に開かせ、布袋乗に乗つたるは、梶原平次景高なり。範頼の御乗物道を讓つて片付けば、梶原が近習ども、蒲の入道殿の御通り、下馬なさるべきかと伺ひける。世捨坊主に何の下馬と、顔差出し坂東聲。それなるは蒲の入道殿な。工藤と本多が扱ひのため北の丸へ御參か。我等始め御留守役の大名小名相詰め申す。出頭第一の祐經と、陪臣またものの本多が鹿論は提灯に釣鐘。鶉の毛の先程も祐經ひける扱ひならば、お爲によく御座んまい。乗物やれ。參れと傳へて八板肩。徒歩臙脛やつこらさ。邊をはねて跳馬の人を蟲ともはいくく。埃蹴かけて通りしは、存外至極の無禮なり。

陪臣の本多  
本多親經は畠山  
重忠の臣。

八板肩  
八人昇のこと。

堀拔井戸の方より二十ばかりの若侍編笠ぬぎ捨て兩手を土に蹲うたり。蒲殿御覽じ、浪人か、主持か此の方への會釋ならば、お通りやれ〜と手を出し給へども、只あつ〜とばかり差俯向き、忍び涙にくれ居たり。蒲殿も斯ばかりの涙あやしと乗物をおりゐの衣立寄つて、如何なる人の何故に用ありげなる落涙見捨てがたし、と宣へば、涙に沈む顔打上げ、直に申すも恐れながら、口惜しの世の中や候。殿は忝くも頼朝公の御弟。九郎判官殿諸共に平家追討の御代官、五萬騎の大將軍。一の谷の大手生田の杜を攻破り、武功と申し、御連枝の六十餘州に冠たる御身。梶原が末子など、我は顔の乗打ち、御無念察し奉る。我等が主人も伊豆相模に名を得し者の末なれども、運の變によつて一族に父を討たせ、本領は其の者の秣刈場となり果て、昔の劍鎗浪人、貧しき家には故人疎く、世にも人にも侮られ、何時花咲かん埋木の身の無念存じ合せて不覺

の涙間はず語りも御恥かしと、又涙にぞ咽びける。入道殿小聲にて、扱は曾我兄弟が下人よな。年月の堪忍さぞあらん。祐經君の寵に誇り、諂を勤めと紛らし、世に蔓はむぎり、鎌倉武士の風儀を紊す佞人。エ、齒痒し、得討たぬな。入道昔の範頼ならば、天晴力を添へんずもの、もどかしさよ、と宣へば、御覽の上は包むに及ばず、曾我が下人鬼王と申す者、今度の御狩を武運の時と兄弟忍び巡りしに、昨日の朝山、敵祐經尾越す鹿に目を付け、弓矢番ひ追ひかけしを、茂みの蔭より五郎時致眞直中をと、急きに急いで放つ矢が、敵の竹笠射かすつて鹿の草分ずんばと當り、祐經が矢は太腹、難なく鹿は止まりしが、時致は隠れなき大力、籠廻り太く矢束も抜群、殊に名乗り家名の印もなく、既に矢穿鑿に及ぶべかつしを、秩父殿の執權本多の次郎親經、我こそ一の矢射たんなれ、と本多と祐經鹿論に取りなし、大事の難は遁れしが、今度の御狩に討ち漏さば何時の世にか、優曇華の、

曾我が天運開くべき。御賢察とばかりいひさして頭をさげてぞ泣き居たる。蒲殿も涙ぐみあつたら勇士ども世に埋もるゝ不便やと、懷中より木札こふだ二枚取出し、是は北條時政、大江の廣元兩印にて鎌倉殿の御前迄も内意を達する割符なり。祐經が用心構へ頼朝を後楯、尺寸側を去らぬと聞く。兄弟に是を貸す。何處迄も恐れなく、鎌倉殿の膝許にて晴業の敵討花やかにして、無念を散ぜよ。必ず隱密々々と別れ給へば、鬼王有難しとも、冥加とも、詞はたらず、御厚恩忝涙つゝめども、心に漏るゝ籠乗物伏拜みくゞてぞ、別れ行く。

下、江戸文學の時代

一、文運の東遷 幕府の創立と共に政權は江戸に遷つたけれども、文化の發展は直ちに之に隨伴することが出来なかつた。寶曆の

前後に到つて、上方を中心とした文藝は、漸く東遷の勢を示し、文化文政時代に及んで遂に榮枯その處をかへて、京阪は全く振はなくなつた。

二、俳壇の革新 芭蕉以來俳諧は都鄙に互つて盛行するに従ひ、徒に時好に媚びて風調甚しく卑俗に流れた。天明の頃谷口蕪村が出るに及んでこの弊風を改め、俳壇に一新生面を拓いた。彼は好んで自然の景物を詠じ、又よく漢詩の趣を交へ、更に歴史的事實を吟じて成功した。世に芭蕉と並べて俳壇の二聖といふ。その後

一茶  
小林一茶、寶曆一三年信濃に生る。生涯を極めて不幸に終つた俳人。句集の外に七番日記、おらが春などがある。

三、文化文政時代 寛政から文化文政にかけて、江戸の繁榮はその極に達し、市民は眞に鼓腹擊壤の有様であつたが、文化の爛熟に伴

四方赤良  
本名は太田翠。  
學者、狂歌作者。  
戯作家、蜀山人  
四方山人、寢惚  
先生等の號があ  
る。文政六年三  
月三歿。

山東京傳  
本姓は灰田、又  
岩瀬とも稱し  
た。洒落本、讀  
本等著作頗る多  
い。洒落本では  
通言總纏。讀本  
では、忠臣水滸  
傳、安積沼、曙  
草紙、稻妻表紙、  
本朝醉菩提など  
が名高い。

うて頽廢的氣分が到る所に満ちてゐる。かゝる時勢は遂に川柳を産み、狂歌を生じ、戯文を盛にした。川柳は、一種の風俗詩とも稱すべきもので、その鋭利なる觀察と、寸鐵人を殺す底の表現は、よく江戸ッ子の氣風を標徴してゐる。狂歌、戯文は通人の文學で、滑稽諧謔よく人の頸を解く。四方赤良はその隨一の作者である。歌壇には香川景樹が出て、「歌はことわるものに非ず、調ぶるものなり」と唱へて、優美なる自然感情を、洗鍊された穩かな調で歌ひ上げ、いかにも上品な歌である。世に之を桂園派と稱し、明治の新派の起るまでは、歌壇の中心勢力であつた。江戸には各種の小説が相次いで起り、作者も亦陸續として輩出した中に、山東京傳は早く數多の作を出して、一時に名聲を高めた。曲亭馬琴次いで現はれ、該博の學と絢爛の文を以て、椿説弓張月里見八犬傳の如き人口に膾炙する多數の作品を出した。その主義

滑稽本

徳川末に出た滑稽を主とした小説。俗問の事件を題材とし、口語の對話が多い。

一九

本名は重貞一、道中膝栗毛の名作がある。

三馬

本名は菊池泰輔、通稱を西宮太助といふ。浮世床、浮世風呂はその傑作。

人情本

洒落本の洒落や滑稽を除いて、人情を主としたもの。淫蕩な情生活を描く。春水の梅曆が名高い。

太祇

炭氏、明和八年六十三歳で歿。

燕村

谷口氏、後與謝氏に改める。攝津の人。

とする所は勸善懲惡、武士道と儒教が作の基調をなしてゐる。その他滑稽本の作者として名を得たものは、十返舎一九、式亭三馬等で、人情本の作者では爲永春水が最も名高い。幕末の衰運 かくて嘉永以後は、幕府その勢を失ひ、歐米諸國は邊境を窺ひ、尊王攘夷の論が沸騰して、人心安定を失ひ、従つて文學の見るに足るものがない。只歌壇に於て僧良寛、橘曙覽、大隈言道等が各々獨創の歌才を示した位のものである。

第一節 俳句抄(下)

太 祇

な折りそと折りてくれけり園の梅

犬を打つ石のさてなし冬の月

燕 村

白梅や墨香しき鴻臚館

指南車を胡地に引き去る霞かな

寂として客の絶間のぼたん哉

夕立や草葉をつかむ村雀

蕭條として石に日の入る枯野かな

易水に葱流るゝ寒さかな

寒月や衆徒の群議の過ぎて後

一 茶

我と來て遊べや親のない雀

霞日や夕山かげの飴の音

いうぜんとして山を見る蛙かな

早少女や子のなく方へ植ゑてゆく

明月をとつてくれろとなく兒かな

大根引大根で道を教へけり  
ともかくもあなたたまかせの年のくれ

第二節 横井也 有

名古屋の高祿の士で、極めて謹直温厚な人であつた。俳文をよくし詩歌俳句狂歌にも亦巧であつた。その俳文集鶉衣は俳文の白眉である。天明三年八十二歳で歿した。

奈良 團 贊

青によし奈良の帝の御時、如何なる叡慮にあづかりてか、此の地の名産とはなれりけむ。世はたゞ其の道の藝精しからば、多能は無くてもあらず。彼よ、かしこくも風を生ずるの外は、たえて無能にして、一曲一かなでの間にも合はざれば、腰にたゞまれて公界

多能は云々  
この外の事ども  
多能は君子の恥  
づる所なり(徒  
然草)

たゞ木の端云々  
法師……たゞ木  
の端などの様に  
思ひたらんこそ  
いとほしけれ。  
(徒然草)

にへつらふねぢけ心も無し。たゞ木の端と思ひすてたる雲水の  
生涯ならん。さるは、桐の箱の家をも求めず、ひさごがもとの夕涼  
み、晝寝の枕に宿直して、人の心に秋風たてば、また來る夏をたのむ  
とも見えず。物置の片隅に、紙屑籠と相住して、鼠の足に汚されるれ  
ども、地紙をまくられて野ざらしとなる扇にはまさりなむ。われ  
汝に心をゆるす。汝、われに馴れて、はだか身の寢姿を、あなかしこ、  
人に語る事なかれ。

袴着る日はやすまする團かな

(鶉衣)

第三節 狂歌・川柳

四方 赤良

生酔の禮者を見れば大道を横すぢかひに春は來に  
けり

山吹のはなかみばかり金入にみの一つだになきぞ  
悲しき

宿屋 飯盛

歌よみは下手こそよけれ天地の動き出してはたま  
るものかは

唐衣 橘洲

世に立つは苦しかりけり腰屏風曲りなりには折れ  
かゝめども

柄井川 柳

賣家と唐様で書く三代目  
米つきに所を聞けば汗をふき  
清盛の醫者ははだかて脈をとり  
わらぢくひまでは能因氣がつかず

川柳

前句附の點者、  
柄井川柳が明和  
二年に附句だけ  
で意味をなして  
ゐるものを撰集  
し、柳橙一編を  
つくつた。これ  
がもとになり、  
獨立の句になり  
一詩形が出來た  
のである。

唐衣 橘洲  
小島氏、田安家  
に仕ふ。

宿屋 飯盛  
石川雅望、國學  
者。

風呂敷を解くとかけだす眞桑瓜  
降參がすむと一度にひだるがり

第四節 近世の短歌

僧 契 沖

夕雲雀芝生に落ちて聲やめば山よりのぼる春の夜  
の月

賀 茂 眞 淵

秋の夜のほがらくと天の原照る月影に雁なきわ  
たる

小 澤 蘆 庵

響き來る松の嵐にうづもれて絶間がちなる谷の水  
音

山杉にねぐら定むる鳥見ればわが友得たる心地こ  
そすれ

上 田 秋 成

みぞれふり夜のふけゆけば有馬山出湯の室に人の  
音もせぬ

本 居 宣 長

ふけゆくも知らで書見るよるくは寝ぬに驚く曉  
のかね

加 藤 千 蔭

墨田河養著て下す筏士にかすむあしたの雨をこそ  
知れ

かはほりの飛びかふ軒はくれそめて猶くれやらぬ  
夕顔の花



村田春海

心あてに見し白雲はふもとにて思はぬ空に晴る、  
富士のね

雨晴るゝ夕ぐれ竹の奥しめてしめやかになく鶯の  
こゑ

田安宗武

ふる雪にみ笠もめさず皇子たち御狩せすなりみ鷹  
つとめよ

清水濱臣

見渡せば根白高萱うら枯れて秋風さむし利根の川  
づら

香川景樹

大井川かへらぬ水にかけ見えて今年も咲ける山櫻

かな

澄む月に水の心も通ふらし高くなりゆく浪のおと

かな

吉水の大鐘の聲ひゞくなり山のこゝろも動くばかりに

敷島の歌のあらす田荒れにけり荒すきかへせ歌の  
あらす田

熊谷直好

打ちしきる麓の里の鳥が音に明けこそ渡れ三保の  
松原

うつし来てうゑもまだせぬ吳竹にやがても月の宿  
りける哉

木下幸文

芹摘むと出でて來たれば鶯の初音きこゆる白河の  
里  
かにかくに疎くぞ人のなりにける貧しきはかり悲  
しきはなし

加納 諸平

雲かゝるわたのみ中にあら潮を雨とふらせて鯨う  
かべり

中島 廣足

波の音は下にさわぎて明くる夜の霧靜かなる木曾  
の山川  
賤の男が芥くゆらす山畑の冬木のうれにひたき鳴  
くなり

大隈 言道

行人をとほく過して花のまにまたなき出づる鶯の  
聲  
道のべの草はむ駒の前にもつゞりさせてふ蟋蟀  
かな  
答へする聲おもしろみ山彦を限なきまでよぶ童か  
な

橘 曙 覽

すく／＼と生ひたつ麥に腹すりて燕とび來る春の  
やまばた  
たのしみはあき米櫃に米いでき今一月はよしとい  
ふ時

一日生きば一日こゝろを大皇の御ために盡す我が  
家の風

天皇は神にしますぞ天皇の勅としいはばかりこみ  
まつれ

僧 良 寛

霞立つながき春日を子供らと手鞠つきつゝ今日も  
暮しつ

歌やよまむ手鞠やつかむ野に出てむ心一つを定め  
かねつゝ

紀の國の高野の奥の古寺に杉のしづくを聞きあか  
しつゝ

月よみの光を待ちてかへりませ山路は栗のいがの  
多きに

平 賀 元 義

水鳥の鴨の川上風をよみ飛びかふ螢見れどあかぬ

かも  
茜さすひるも見くらし飽たらで夜渡る月に猶ぞ花  
見る

### 第五節 洒落本、讀本、滑稽本

洒落本は黄表紙と共に繪入小説であるが江戸町人の特色  
粹や通の本元、遊里等の寫實であつたため、その代表的作家山  
東京傳の如き遂に風俗を亂す故を以て刑に處せられた。そ  
れで、方面を變へて、讀本に筆をつけ、その弟子瀧澤馬琴に至り、  
これを大成した。

馬琴は寛政二年二十四才で山東京傳に弟子入し、これより  
文筆生活が初まり、椿説弓張月三七全傳、南柯夢、南總里見八犬  
傳、近世説美少年録等幾多の大篇を相次いで出し、嘉永元年八

十二歳を以て世を終つた。

洒落本から分立したものに滑稽本がある。江戸末期の廢頹的氣分のうちに、どこか洒落氣茶番氣のゆとりを見せた平民生活を描いたもので、十返舎一九の東海道中膝栗毛、式亭三馬の浮世風呂、浮世床の如きはその尤なるものである。

白峰

かくて其の日も暮れなんとする程に、と見れば、群鴉星を負うて茂林に歸り、樵夫月を戴きて家路に急ぐ。唧がましき蟲の音に、葉末の露ぞ濃やかなる。既に人跡絶えければ、爲朝は古りたる木の下に立寄りて、衣服を更め、御墓に詣でて見れば、千草は一叢の煙を殘して、玉殿燈なく、秋螢は五更の夜を照して、荆棘跡を塞げり。百磯城や紫の袖を連ね、朝政聞しめしける十善の君として、過世の惡

報は免れ給はず。青塚苔滑にして、白楊風に戦ぎ、旅魂幽靈今何處にか徘徊ひ給ふやらん。げに人間の富貴は、夢の中なる快樂にて、妻子珍寶及王位も、身死しては伴侶ならず。さればとて三界の火宅を出でて、永く九品の淨刹に至らん事、猶容易にあらざめり。此を見、彼を思ふにも、御廟の柱を見上ぐれば、二首の歌を書きたり。

讚岐に詣でて松山の津と申す處にて新院おはしま

しけん御跡を尋ねしにかたもなかりしかば

松山の浪に流れて來し舟のやがて空しくなりにけるかな

白峰と申す處の御墓に參りて

よしや君昔の玉の床とてもかゝらんのちは何にかはせん

仁安三年十月日圓位とあり。さては西行法師も、去々年の冬、此

所へ參りけん」と頷きつゝ、石の玉垣の斜なる扉を押し開きて蹲踞し、さて申すやう、「君十善萬乘の聖主として、錦帳を北闕の月に輝し給ひしも、今は懷土望郷の魂、玉體を南海の俗に混ず露を拂ひて御跡を尋ね奉れば、秋草泣いて涙を灑ぎ、嵐に向ひて君が墓をとへば、老檜悲んで心を傷ましむ。佛儀は見えずして、唯朝の雲、夕の月を見る。法音は聞えずして、唯松響鳥語を聞く。軒傾きては曉風寒く、夢破れては夜雨防ぎ難し。昔今の御有様、いと痛はしくも淺ましくも思ひ奉れど、微臣が孤忠を述ぶるに由なく、既に力竭き勢究りて、今世の誠忠を訴へ、後世の苦樂を共にし奉り、君につれなかりつる者共を、ことごとく取り殺さばやと思ふのみ。圖らずも大島を流れ來て、尊靈を驚かし奉るなり」と申し果てて、涙を潸然と落しつゝ、やがて氷なす短刀を抜いて、腹に突き立てんとするに、怪しきかな。手足忽に癱え癱れて、いかにともすべなし。(椿説弓張月)

## 浮世風呂

(五十餘の母様内から迎ひに來り、門口から) 母おらが太吉は何をして居るの」(と云ひながら、梯子を上り)「コレ太吉や。此の子は何をして居るナ。

父さんが仕事をしかけて、今から店へ行きなさるつて、おのしが歸るのを待つて居なさはナ。先刻から首を長くして、モウ歸るかと思ふに、再び三寶歸るもんぢやアねえ。父さんがじれ出しなさるだらうと思つて、ハツ／＼として居るに、ホン／＼思ひやりもねえ。能いきぜんだア。飯を食つて椀を突出すと、モウはや湯へ行き候と手拭を持つて出たがる。いくつだと思ふ。二十三の四のと、年ばつかり取つて、おれに世話ばつかりやかせて、世が世なら嫁子を貰つて、親を結構にすごす時分だア。世間の息子さん方を見たが能い。おのしがやうにうぼつぼで遊んであるく者は、又一

おのし、お前。

三寶

放題の意。ここは決して云ふ意。

きぜん

氣前のこと。

飯を

メシヨオとよ

世が世

己れの榮える時

代。

うぼつぼ

うからかと遊び

まはる狀をいふ

語。

人とありやアしねえ。怠ける奴に、ろくな事を考へ出した例がねえ。見たくてもねえ。將基をさして飯の食はれるほどになれば能いけれど、おのしがやうな物あきをする者は萬一に飽つぼくて何を一つ遂げた事がねえ。くやしくば石垣へ頭を打付けて、死んでもしまつたが能い。おのしがやうな者は、死んでも親は泣かねえ」(此の一言子を思ふ親の心強意見にておのづから恩愛の情を含めり)

母「イエサ、もうどなたもお喧しからうが、可愛くも何ともござりません。ホンニくおえねえなまくら者で、悪くてなりません。あれがお蔭で、私が不斷父さまに叱られます。私が陰になり日向になりして、父さまの前を繕つて置いて、それでさへ常不斷しくじります。人といふ者は、何ぞれ角ぞれ、取得のあるもんでござりませぬが、あれに限つちやア、鶉の毛で突いた程もござりませぬ。親に似ねえ子は鬼子とやらで、父さんが曲つた事の嫌えな人だのに、あ

おえねえ  
仕方の無い。  
なまくら者  
なまけもの。  
陰になり日向に  
なる  
色々の方法で救  
護すること。  
何ぞれ角ぞれ  
何か、かにか。

のうくとした  
氣の晴々するこ  
と。のびのびと  
した。  
せいせう乾し  
氣根の痛め疲ら  
されること。  
あて事もねえ  
とはうもない。

天井見せられる  
へこまされる。

んな子を持ちましたから、世間の人様に私が面目次第もねえ。お前方の前でいふは悪いが、全體友が悪いからさ。折角内に仕事をして居る者をば釣り出しに來てなりません」(我が子の悪しきを思はず、他人の子を怨むは、愚痴無智の母親氣質却つて我が子を悪しきに誘ふ。母たるものかゝる類はよく、慎むべき事なり)

母「四五日も内に居るから、ヤレくとしたと思ふと、又は駈け出し、又は駈け出しして、本のせいせう乾しさ。モウく、ほんに命も精も續くもんぢやねえ、サアく歸つた。あて事もねえ」

太吉「今歸らアナ」

母「今歸らアナぢやねえ。直に歸るがい」(下梯子を下る)

源「太吉めエ、お袋に天井見せられたナ。くやしくば石垣へあたまをぶち付けて、死んでもしまふが能い。おのしがやうな者は、

死んでも親は泣かねえツサ」(ト口眞似をする)

一はながけ  
眞先に。

太「死んだら一はながけに泣くだらう」(トするい詞をいふも、おのづから甘やかしたる毒の残りしなり)

(同じく口眞似) 太「全體友が悪いからさ」

源「アイサ。さやうでござんやす。おやんなさいやしツ」

二階番頭「サア〜太吉さんお歸んなせえ 親の詞を背く物ぢやアない。親を不孝にすると、老つて又我が子に不孝をされる」

みなく「サア〜歸らう〜」

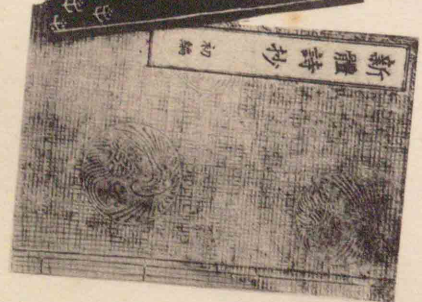
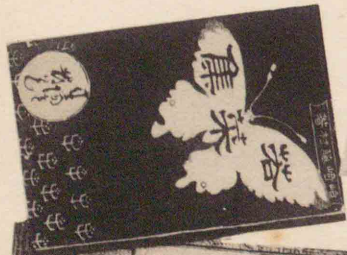
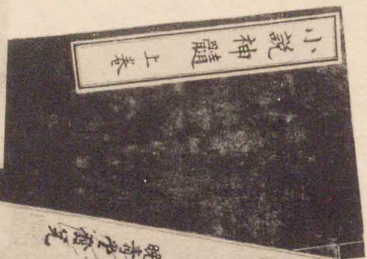
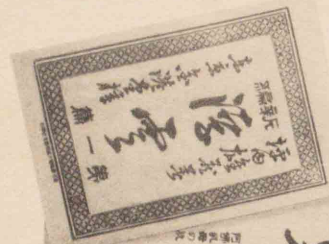
太「ア、湯ざめで寒くなつた。湯の中でおつな聲がするぜ」

源「ほんにナア」

二階「あれは座頭の坊が來たから、大かた仙臺淨瑠璃だらう」

(前編卷之下)

おつな聲  
しやれた聲。妙な聲。  
二階 番頭のこと。最古參の番頭を、選ぶ習慣である。  
仙臺淨瑠璃  
江戸中世、奥州に流行した。



## 第六章 近代の文學

徳川三百年泰平の夢は歐米諸國の叩關にさまされ、國民の自覺を促し、遂に明治維新となつた。近世以來の階級は打破せられ、國民は平等となり、外歐米の文化を移植し、内我が國民の特性を發揮し、國運は旭日昇天の勢を以て展開し、僅々半世紀餘の間に、世界三大強國の一といはれるまでになつた。かゝる進歩は世界史上に未だ曾て見ないところである。この間にあつて文學の世界もこれ等の影響をうけて幾變轉しつゝ、進展していつた。

維新の戰亂は收つた。數百年の鎖國の間に遅れてしまつた世界文明をとり入れるために國をあげて奮闘した。そのため文藝に力をつくす餘裕はなく、たゞ文學と稱すべきものがあつたとすれば、それは舊幕時代の戲作の殘流に過ぎなかつた。しかし當時

### 新體詩抄

明治十五年八月新體詩の集として始めて世に出たもの。

### 若菜集

明治三十年八月島崎藤村の第一詩集として出たもの。

### 當世書生氣質

明治十八年六月の第一號を示した。春のやおぼろ戯著となつてゐる。

### 小説神髓

明治十九年上下二卷として發表されたものゝ上卷である。

### 文學界

明治二十六年一月の創刊號である。北村透谷、平田秃木等の作品が出てゐる。

### 浮雲

明治二十年六月に發行された二葉亭四迷の小説である。但し表紙には坪内雄藏著とし扉には春のや主人二葉亭四迷合著として出てゐる。



國民生活の中心であつた政治熱は、歐米に學んで新聞紙を刊行せしめ、つゞいて政治小説の翻譯を促して、そこに新時代の文學の萌芽が認めらるゝに至つた。

而して明治も十數年を経、西洋の文明も稍、咀嚼せられ、漸く物質文明の皮相にのみ腐心することの愚を悟り、文藝美術方面に注目するやうになつてきた。坪内逍遙はこの時に出て、新文學運動の宣言書ともいふべき小説神髓を公にし、つゞいて硯友社一派興つて古典文學への回顧を主張し、浪漫主義の思潮が一時の盛を極めた。この間にあつて眞面目に人生の問題に悩み、高き理想にあこがれ詩文の方面に活躍した文學界の人々があつた。

日清日露の國を賭しての大戦は國民の世界的自覺を促進し、日本國民は一擧にして世界的文明に參與する資格を得た。時恰も歐洲の思想界を風靡してゐたものは個人主義を基調とした自然

主義の文學であつた。

この自然主義は明治の末年より大正にかけて文壇の主流をなしてゐた。この間にあり唯一人大勢の外に超越し異彩ある作品を出した作家に夏目漱石がある。低徊趣味といひ、餘裕派と稱せられてゐる。當時別に正面からこの自然主義に對抗して生れて來たのが白樺一派の新理想主義であり、やがてこの自然主義に取つて代つたのが純藝術派の現實主義であつた。かくて今日の文壇に活躍せるはこれ等の流派と見るべき者の外に、世界大戦後の思想界の影響をうけて無産階級の藝術を提唱する者が出るに至つた。けれども未だ今日に於ては藝術作品として見るには十分でない。寧ろその活躍は將來に屬するものと思はれる。

### 第一節 小説

一、政治小説

明治初年は外來の文物思想が輸入され、その吸収に國民は日も足りない有様であつた。功利主義的思想の福澤諭吉は實利實益の學問を唱導して新文明の先驅をなし、中村正直は儒教思想を以て基督教を説いて精神文化の開拓に功を奏した。しかし文藝方面に於ては相變らず江戸文學の連続であり、假名垣魯文の如き作家がゐるに過ぎない。

而して新文學の曙光のかすかに見え出したのは明治十年前後で、その發生を導いたものは當時の政治中心思想である。その初めは英佛の政治小説歴史小説或は傳奇的趣向の多く含まれた物語の翻譯であつた。其の内一二を挙げると、丹羽純一郎譯「寄想春史」(ポンペイ最後の日)、坪内雄藏譯「慨世士傳」(關直彦譯「春鶯囀」等)、これ等は多く政治家若しくは政論家の翻譯執筆になるものである。

福澤諭吉

天保五年大阪に生れ、明治三十四年六十八歳を以て逝く。慶應義塾はその創設にかゝる。その著の主なるものに「窮理圖解」(一世界國畫)「學問のすゝめ」(文字の教)「かたは娘」等がある。

中村正直

天保三年江戸に生れ、明治二十四年五十六歳で卒した。譯書に「西國立志論」(西洋品行論)「自由之理」等がある。

假名垣魯文

文政十二年江戸に生れ、明治二十七年歿。年六十。著書に「西洋道中膝栗毛」(安愚樂錦)「胡瓜圖解」がある。

政治小説として當時の讀者をひきつけた主なものには、矢野龍溪の「經國美談」柴東海散史の「佳人之奇遇」末廣鐵腸の「雪中梅」花間鶯等がある。就中「佳人之奇遇」は最も廣く讀まれ、最も大きな影響を社會に與へたものである。

二、坪内逍遙と二葉亭四迷

明治二十年前後になつて盲目的な歐風主義から國內をふりかへつて見るやうになり、こゝに新しい明治文學の曉鐘となつて現はれたものが坪内逍遙の小説神髓である。

小説神髓は上下二卷よりなり、上卷には大體小説論を述べ、小説とはがゝるものであるといふことを知らしたもので、心理描寫の説客觀的傍觀的態度の説、排主觀説、藝術は人生の眞を表現するをもつて生命とするといふ主張等近代寫實主義のもつ特色の主要なものが含まれてをり、これによつて文學は勸善懲惡のためのも

小説神髓

上卷は明治十八年三月に出版、後改め、十九年上下二卷が出版された。

のである。滑稽洒落を主眼とすべきものである等といふ舊觀念は破壊され、新しい文學の道を示したのである。下巻は上巻に述べた主旨に基いた小説作法を説いたものである。

逍遙はこの意見の實例として「三讀當世書生氣質」を出した。傍觀的態度であり、かなり寫實的に世態人情性格が描寫されてをり、今までの小説に對しては新機軸を出してゐるから、新しい明治小説とは言ひ得るが、猶、性格描寫に類型的なところがあり、事件になり重きをおき、未だ全く戯作者風の脱けきらぬ點がある。寧ろ小説神髓は明治二十年に出た二葉亭四迷の「浮雲」に於てその主張を裏書されたといつてよからう。

二葉亭四迷は本名、長谷川辰之助。露西亞文學の造詣が深く、ツルゲネーフ等の翻譯を出して、この方面にも功績がある。「浮雲」は寫實的態度をもつて書かれてをり、心理描寫は精細で作爲の跡が

なく、人生を觀察する態度が眞面目である。文章は言文一致を以て書かれた最初のものであるが、かなり成功してゐる。當時としては、全く破天荒のものであつた。其の後あまり小説に筆をとらなかつたが、明治四十年に「平凡」を出し、四十一年露西亞に出かけ、翌年病を得て歸途についたが、遂に印度洋上に不歸の客となつた。情熱的な彼は小説家としての他面に憂國志士の面影を多分にもつてゐた。

### 三 硯友社と尾崎紅葉

逍遙の眞を生命とする人生的傾向を受けついだものは一の二葉亭あるのみで、別に擡頭したのは硯友社一派の藝術至上主義であつた。

硯友社は明治十八年三月尾崎紅葉、石橋思案、山田美妙等によつて組織され、つゞいて川上眉山、巖谷小波等も之に加はり、機關雜誌

として初めは我樂多文庫を出した。この派の特色は耽美的な寫實主義にあつた。人生のための藝術でなく、藝術のための藝術の立場であり、華麗な浪漫風の作品にその代表作がある。而してその文章上の工夫に努力し、言文一致體、雅俗折衷體などの上に新機軸を出し、明治の新文章を或程度まで完成したといふことが出来る。

この硯友社の主腦者であつた尾崎紅葉は、中にも努力精進し、遂に一時小説界の覇者たるの觀を呈した。元祿復興の氣運に乗じ、西鶴の摸倣を試み、明治二十九年には彼の作品中に於ても出色の「多情多恨」を出した。この作の表現は彼自ら「米の飯」と矜持しただけに平坦な筋の上に展開する心の動きが客觀的に取扱はれ、清麗な口語體で書かれてゐる。翌年より「金色夜叉」に筆をつけたが、その刻苦精勵したにかゝはらず、説話中心の興味を爲に通俗化して

しまつた感があつた。しかし彼は文章報國を標語としただけに文章の爲に眞に注血の苦心を獻げた。その俊雋の人格と洗鍊された社交性から、先づ以て己を認めしめ、一般文士の社會的地位を高めるに至つた點はまた忘れることの出来ぬ功績である。

#### 四 幸田露伴

紅葉と並び稱せられてゐるのは幸田露伴である。氏は理想派主觀派に屬する作家で、自分の思想を描かうとするのである。これに氏の作品を通じて二つの傾向を見ることが出来る。即ち熱烈な意力による藝術の道への精進と、佛敎的悟道の精神を強調しようとしたものとで、前者の代表作にしては「風流佛」「一口劍」「五重塔」があり、後者には「對鬪體」がある。中でも「五重塔」が特に有名である。藝術の永遠性に對する氏の信念がこの作の基調をなしてゐる。文章は内容と釣合ひ適勁なものである。同じく西鶴にならつた

といひながら、西鶴の才をうけたのが紅葉で、氣をうけたのが露伴である。柔と剛情味と意氣現實と理想客觀と主觀、兩々相峙立した状は洵に當代の壯觀であつた。

五 森鷗外

鷗外は王朝式典雅と歐文脈情趣とを融合した清新な文體を以て「舞姫」うたかたの記等を作り、又獨逸文學の紹介者として文壇人士へ新しい刺戟を送り、自ら雜誌「しがらみ草紙」を主宰し文學評論にも筆をとり、當時坪内逍遙と論陣をはり、以て文壇に新しい智識を與へたことも少くなかつた。

六 樋口一葉

樋口一葉の文學的生涯は明治二十五年から二十九年二十五歳を以て死ぬまで僅か五年間に過ぎなかつたが、その文學的生命は「濁り江」や「たけくらべ」と共に永久に残るであらう。

泉鏡花  
紅葉の門下でその代表作は「高野聖」「湯島詣」である。

観念小説  
悲惨な事象や不具病的な人物を點出してこれに或觀念を寓したもので、眉山の「書記官」「うらおもて」「鏡花の夜行巡査」「外科室」はそれである。

廣津柳浪  
文久元年の生れで、小説を書き出したのは明治

開關以來の大戦日清戦争は國民の自覺を促し、延いて個人の自覺を促した。そしてこの時代相を代表して立つたのが高山樗牛で、日本主義の提唱となり或はニイチエの個人主義に結びついて美的生活の讚頌となつた。この傾向は硯友社一派其の他の文壇にも影響し、深く人間の心理を描かんとするやうになり、川上眉山泉鏡花の観念小説となり、更にこの傾向を深めた廣津柳浪の悲惨小説となつた。同じくこの人生の暗い方面を眺め、しかも深い内省と精しい描寫とによつて作者の個性を明確に發揮した一巾幗作家が、即ちこの樋口一葉である。

一葉は、西鶴に學び、露伴の教を受けたので、その文章には稍、古典的な匂があるが、その描くところは血あり肉ある生きた女性そのものであり、兩眼に涙をたゝへてゐる女、悲しいあきらめのうちに我を棄てゝゐる女、さういふ女を深い理解と厚い同情とをもつて

二十年頃からである。代表作は「今戸心中」「變目傳」「黒蜥蜴」である。

描いた。自ら宿命の前に忍従する外なしと悟つた諦めの涙に潤む眼でじつとみつめた深みのある作品をのこしてゐる。彼女が晩年に出した「たけくらべ」「濁り江」「十三夜」われから「別れ道」等は即ちそれである。

#### 七 自然主義派の人々

日露戦争によつて個人の自覺は一層深められ、現實相に直面すると同時に、歐米の科學を根柢とした近代思想が流入し來り、個人主義を基調とし、世紀末の陰鬱な宿命的人生觀上に立ち、一切の虚偽形式を排して、人生の現實をありのままに描寫しようとする自然主義文學の勃興となつた。あるがまゝの人生をあるがまゝに描寫しようとする態度は、進んで人生の暗黒面を大膽に描かしめた。普通その先驅者を國木田獨歩としてゐる。

しかし國木田獨歩は自然主義派の小説と一脈相通ずる點もあ

るが、その根柢には宇宙の不可解、人生の宿命に驚異するところより生ずる神祕思想が流れてゐる。たゞ現實を寫さうとする態度がたまゞ、自然主義派と一致したのである。初期の代表作「武藏野」は自然讚美であり、「牛肉と馬鈴薯」「運命論者」の如き代表作は宇宙驚異の所産である。「少年の悲哀」「號外等」に見る印象的な又鋭い深みのある描寫は眞摯な人生批判の成果であつて、生れながらの短篇作家であるといふ評は誤つてゐない。

而して島崎藤村、田山花袋、徳田秋聲、正宗白鳥等を以てこの派の代表作家とする。花袋は平面描寫を主張し、あくまで客觀的に事象を寫さうとするところに特徴を有してゐるが、主情的な風があり、詠歎的なところがある。秋聲は質實に人生を描寫し、白鳥の作品には虚無的な思想のたゞよつてゐることが感じられる。一部の自然主義作家に比し、嚴肅な心境を主題として取扱ひ、人間本然

田山花袋  
作品に「薄團」「生」縁「田舎教師」等がある。  
徳田秋聲  
作品に「田産」「足迹」「徴」等がある。  
正宗白鳥  
作品に「何處へ」「二家族」「泥人形」等がある。

の姿を凝視した作家が藤村である。彼が天才的な詩人としての活躍の方向を轉換して、小説に筆をとり、その價值をみとめられた「破戒」を出したのは明治三十九年であつた。つゞいて四十一年には「春」四十三年には「家」を出した。行届いた觀察と落着いた筆致とによつて整然と描かれてゐるところ、自然主義もこゝに至り頂點に達したと言つてよからう。

#### ハ 夏目漱石

俳人であり英文學者である漱石が小説に手を染めたのは、自然主義派の高潮期であつた。彼は夙に自然主義派文學の主張を、生死を脱離し得ぬ煩惱底のものとし、生死關門を打破した所に第一義の人生觀は樹立されると斷じ、靈性を尙び、内生活を重んじ、主觀を許容するところに、自然主義派の知らぬ明るい廣い世界が展げられると説いてゐる。

輕快な諷刺に満ちてゐる「吾輩は猫である」漢洋二文明をとり入れ非人情をとく「草枕」純朴な情の活躍せる「坊ちゃん」彫琢絢爛を極めた文章で道義的色彩を描いた「虞美人草」つゞいて「三四郎」それから「門」「坑夫」「行人」「心」「道草」と次第に華麗な表現から内面的に進み、絶筆「明暗」に至り、虚偽醜惡をも彼の廣大な愛の心で抱擁し溶化するまでになつてゐる。無限の愛、無窮の慈悲、彼の所謂「則天去私」の境地がこゝに展開する。この境地は人類愛を標榜する新理想主義的傾向を産出するものであつたといつてよからう。自然主義派の現實突入的態度に對し高踏的態度に出で、利那的態度に對し低徊的態度に遊んだので、高踏派又は餘裕派文藝といはれてゐる。

この外自然主義の反動として出たものに永井荷風・谷崎潤一郎等の藝術至上主義がある。しかし自然主義に對する反動として起つた新理想主義中最も有勢で次の時代を支配するに至つたの

は白樺一派の人道主義である。

### 九 白樺派

白樺派の中心をなしたのは武者小路實篤である。彼は學習院時代の仲間志賀直哉有島武郎里見弴長與善郎等と雑誌「白樺」を中心として、自然主義に對し人道主義の旗印の下に集り、劃期的な仕事を試みた。彼等は自然主義の無解決懷疑の代りに、明るい生きがひのある人間生活を肯定した。

武者小路は人間を端的に表現しようとして、その文は洗鍊されない、しかし溢れ出る勢と力とに満ちてをり、武郎は武者小路に比して理智的現實的である。直哉は描くことを的確に握み、純な表現により、無駄のない文を書き、磨きのかゝつた單純化といふ筆致を有つてゐる作家である。

同じ新理想主義作家中漱石の流を汲む者に、冷靜な理智によつ

武者小路實篤

宮崎縣に一新し

い村を建設し

た。作品に「世

間知らず」ある

青年の夢「小

き運命」等があ

有島武郎

作品に「小

き

者へ「カインの

末裔」「迷路」等

がある。

志賀直哉

新技巧派の人と

されてゐる「和

解「雨蛙」好

物の夫婦「暗夜

行路」等がある。

芥川龍之介

「鼻」「藪の中」

「戯作三昧」等が

ある。

菊池寛

「忠直卿行狀記」

「恩讐の彼方に」

「蘭學事始」等有

ある。

森田草平

「煤烟」「自叙傳」

等がある。

て人間心理と、人間の現實相に新解釋を與へんとした芥川龍之介、菊池寛、森田草平等がある。

ともあれ自然主義以後新理想主義には色々の人々が出たが、やはりその中心をなしたものは白樺一派であつた。

其の後、新技巧派、新古典派、新現實派、新感覺派等の擡頭あり、更に無産文藝が興らうとしてゐる。然も一作家を或一派にきめてしまふことの出来ない状態であつて、今日の文藝界はたゞ混沌の一語に盡きる觀がある。然し過去六十年間に發達した跡をふりかへる時、そこに著しい進歩の跡が認められるのであるが、行路は決して坦々たるものではなく、小説の神髓を辿らうとして、幾回か躓き幾回か横道にそれつゝ、今日に至つたのである。しかして世界大戰後、世界人として自覺すると共に、民族的傳統の精神に目覺めて來た國民によつて、新に日本文學の本質的發展が期待されるで



あらう。

第二節 詩歌

一 短歌

明治初年に於ては香川景樹の桂園派がなほその勢力を占め、御歌所の高崎正風を中心として海上胤平等の歌人は少くなかつたが、昔ながらの弄月吟花で、未だ清新の氣に満ちた何ものも窺はれなかつた。

落合直文の短歌革新によつて、初めて明治の歌壇に新機運が導き出された。明治二十五年淺香社を組織し、その門下に與謝野鐵幹金子薫園尾上柴舟鹽井雨江等が輩出した。

緋緘の鎧をつけて太刀はきて見ばやとぞおもふ山

櫻花

鐵幹は「明星」を主宰し自ら雄健な調をうたつたが感情に粗いところがある。其の妻晶子は歌才最も優れ情熱的な歌風を以て歌壇を驚かした。

清水へ祇園をよぎる櫻月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき

柴舟には清楚な感に理智的傾向の伴ふのが見られる。

つけすてし野火の烟のあかくと見えゆく頃ぞ山は悲しき

薫園の歌には清麗で溫和な調がある。

蟲の音にきえしおもひのふとわきて夕月野みち歌によろしき

佐々木信綱は主觀的な歌よりも自然を眺めた靜かな情趣をもつた歌が多い。氏は歌人として又萬葉研究家として特筆すべき人

である。

花多き川ぞひ椿のこりなく散りて流れて春くれんとす

正岡子規は明星派の浪漫的なのに對し、彼が俳句になしたと同じく純客觀的表現を主張し、寫生をとなへ萬葉調を鼓吹した。

瓶にさす藤の花房短かければ疊の上にとゞかざりけり

自然主義の影響によつて、現實をふりかへり人生に目覺め、浪漫的なものにあきたらず、實觀を重んずるに至つた。しかして、現實に直面してそのあまりに悲哀なるに感じ、自ら感傷的となつた。これが明治三十九年頃から四十二年にかけての歌人の大體の傾向であり、窪田空穂、太田水穂、若山牧水、前田夕暮等の歌人が相並んで歌壇を賑はした。空穂は抒情的で清新の味がある。

鉦ならし信濃の國を行き行かばありしながらの母  
見るらむか

水穂は新古今集的などころがあり觀念をよまんとしてゐる。

このねぬる朝のねざめの蚊帳ながら吹かれて空の  
青き雲見る

牧水は生れながらの歌人といつても過言ではない。

幾山河越えさりゆかば寂しさの終てなむ國ぞ今日  
も旅ゆく

夕暮は自ら通例人であることを望み、通例人の思つたまゝをそのまゝ、歌とする。そしてたゞ眞實でありたいと叫んでゐる。

うまごやし花さきそめぬ小さな家のあるじとな  
りしその後

自然主義の影響をうけた歌人のうち、前記の歌人等と趣を異にし、

實生活そのまゝを詠んだ所謂生活派の歌人に石川啄木・土岐哀果がある。哀果は啄木と共に所謂三行書をはじめてゐる。

滴り滴る汗の

快さよ、

停みて、しばし、拭はず。

啄木はもと明星派から出て生活派の歌をよむに至つた。彼の魂には漂浪性があり、淋しさがあらはれてゐる。これが平凡な實生活詠みながらも、一面浪漫的であり感傷的であるといはれるところである。

何となく

今朝は少しくわが心明るきごとし

手の爪を切る

北原白秋はこの間にあつて独自の調を示してゐた。彼は短歌は

一箇の小さい緑の古寶玉である。古い悲哀時代のセンチメントの精である。古いけれども棄てがたい。「鳴かぬ小鳥のさびしさ……それは私の歌を作るときの唯一無二の氣分である」といつてゐる。

ひいやりと剃刀ひとつ落ちてあり鶏頭の花黄なる

庭先

白秋は島木赤彦を中心とした「アララギ」一派の齋藤茂吉・中村憲吉等に影響を與へた。彼等は寫生を主とした。同じ寫生といつても子規の言ふ如き軽い意味でなく、自己を自然に没入し、自己の生命と自然の生命とを合一せしめようとする境地に立つて歌はうとした。しかしこの境地に達するには修養を積まなければならぬといひ、嚴肅化された歌道を唱へた。

島 木 赤 彦

下男らは爐に足投げぬ櫛わかば雨白々と吹きさか

る今

齋藤茂吉

さびしさびしいま西方にくるくゝとあかく入る日  
もこよなく寂し

中村憲吉

夕映の照りとゞかざる眼のまへの坂をばくらく人  
かげゆくも

この他に「現代人は現代語で歌を作るべきだ」といふ主張によつて口語歌が試みられ、又従來の三十一文字に拘泥する必要はないではないか」といふので不定形歌が試作されてゐる。

二 俳句

正岡子規の出るまでの俳句はたゞ舊幕時代からの月並調に過ぎなかつた。明治二十年時代に入り文學革新の氣運の起ると共

に子規は従來の俗調を排して、清新な天明調への復歸を唱へ、淡々たる寫實の妙趣を鼓吹し、當時あまり世に知られてゐなかつた蕪村の眞價を認め、その精神に入らんとし、更に進んで芭蕉の態度にまで到達せんとした。

山門をぎいと鎖すや秋の暮

縁日へ押出す菊の車かな

夕鳥一羽おくれてしぐれけり

子規の門下には内藤鳴雪、河東碧梧桐、高濱虚子、夏目漱石等がある。

貫ひ來る茶碗の中の金魚かな

鳴雪

夕月や橋高らかに踏みならし

畑打の四五人よりし晝餉かな

碧梧桐

楠の根を静かにぬらす時雨かな

燒山の夕暮淋し知らぬ鳥

虚子

灯ともせばはやそことべり火取蟲

濃やかに彌生の雲の流れけり

漱石

凧や海に夕日を吹き落す

後、碧梧桐は新傾向句を唱導し、十七字に拘束されない句をつくり、荻原井泉水も亦自由詩を唱へてゐる。

門を出れば學校休み日の銀杏そよぎゐる

碧梧桐

コスモスくねる枝々の蕾をもち起き來る

空をあゆむ朗々と月ひとり

井泉水

日が果つる更に麗かにして月うまる

三、新體詩

西洋文藝の研究は譯詩によつてやがて我が國に新な詩形を創始せしめた。即ち明治十五年「新體詩鈔」が刊行されて新體詩なる

若菜集

形式は七五調を主としてゐる。藤村はついでに「一年」「葉舟」「夏草」四年「落梅集」を出してゐる。

土井晩翠

「天地有情」につづいて四年「曉鐘」九年「東海遊子吟」を出してゐる。

ものが唱導され出した。これはつゞいて落合直文・山田美妙等によつて培はれたが、文學界の人々が出てこの方面に力をつくし、遂に明治三十年島崎藤村の「若菜集」が刊行されるに至つて従來の新詩としての種々の試みが完成されたかに見えた。

「若菜集」は青年藤村が情熱に燃える青春の心を複雑なそして哀愁のこもつた情趣に富んだ詩篇としてまとめたもので、浪漫的な句のかなり強いものである。しかし彼の作品は時代が下るにつれて浪漫的の句ひがうすらぎ現實的となつて來てゐる。この傾向がやがて彼を小説界に導いたものと思はれる。

藤村と相對して當時の詩壇に並び稱せられたのは土井晩翠である。明治三十二年「天地有情」を出してゐる。彼は藤村の感傷的で優雅であるのに對し、冥想的で雄渾な格調をもつてゐた。前者は女性的で抒情詩に秀れ、後者は男性的で敘事詩に秀れてゐた。

その他與謝野鐵幹・岩野泡鳴等も新體詩を試みてゐるが、藤村・晚翠の後をうけて活躍した詩人は薄田泣菫と蒲原有明とである。

薄田泣菫  
廿二年「暮笛集」  
 廿四年「ゆく春」  
 廿九年「白羊宮」  
 等を出してゐる。

海潮音

廿八年に出してゐる。

蒲原有明

廿五年「草わかば」  
 廿六年「獨絃哀歌」  
 廿八年「春鳥集」

泣菫はキーツに私淑してその影響をうけ、多感な、そして奔逸の趣のあるところ、藤村に稍似た點がある。彼の詩は古典的な風格をもち、豊かな幽雅と哀愁とを匂はしてゐる。しかし上田敏の譯詩「海潮音」等の刺戟をうけ、やがて象徴詩的傾向になつていつた。

蒲原有明はスキン・パン・ロセツチの感覺的・神祕的・心理的な發想及び技巧に影響されるところが大きかつた。彼も亦藤村の影響をうけ、浪漫的な詩人であつた。情熱強く、人生の憂鬱や寂寥の世界へ奥深く進み、抒情的の幽韻に富んでゐるところは後期の象徴詩の運動となり、彼の詩に泣菫以上の深みがあるといはれてゐる所以である。

少し遅れて三木露風も象徴的詩人として活躍した。彼は澄み

きつた心境に於て、東洋の新しい簡素と藝術精神とを深く象徴した。この外、石川啄木・野口米次郎・河井醉茗・北原白秋・野口雨情・室生犀星・川路柳虹・山村暮鳥・堀口大學・西條八十等の詩人相次いで出て詩壇に活躍してゐる。

かくて明治時代に創められた新しい詩には、五七調、七五調或は八六調十音詩等と種々の形式が試みられ、更に口語詩が唱導されてゐる等詩の形體リズムの方面よりいつても、その詩想よりいつても、今後如何に發展して行くかは興味ある詩壇の問題である。

中等  
教科  
日本文學史  
終

文學年表 (一)

文學者はその歿年の位置に記しました。  
編著年代未詳の書は推定の位置に排列しました。  
近代は特に一年毎の年表にしました。

紀元	時代	文	學	者	文	學	書	一般歴史重要事項	支那
一〇〇〇	上	文	學	者	文	學	書	一般歴史重要事項	周
二〇〇〇									
三〇〇〇	古	文	學	者	文	學	書	一般歴史重要事項	秦
四〇〇〇									
五〇〇〇									
七〇〇〇									
八〇〇〇									
九〇〇〇									
一〇〇〇〇									
一一〇〇〇									
一二〇〇〇									
一三〇〇〇									
一三七〇	柿本人麻呂 (一三七〇頃)	古事記 (一三七二)	日本書紀 (一三八〇)	奈良遷都 (一三七〇)	周				
一四〇〇	奈安麻呂 (一三八三)	大伴旅人 (一三九一)	山上憶良 (一三九三)	山部赤人 (一三九五頃)	橋部諸兄 (一三六二—一四一七)	安倍仲麻呂 (一四三〇)	朝		
	良	山部赤人 (一三九五頃)	懷風藻 (一四一三)	唐					



# 文學年表 (一)

文學者はその歿年の位置に記しました。  
編者年代未詳の書は推定の位置に排列しました。  
近代は特に一年毎の年表にしました。

紀元	時代	文	學者	文	學	書	一般歴史重要事項	支那
一〇〇〇	上	柿本人麻呂 (一三三〇頃)		古事記 (一三七二)	日本書紀 (一三八〇)	三韓征伐 (八六〇) 王仁來朝 (九四五)	周	周
二〇〇								
三〇〇	古	太安麻呂 (一三八三)		懷風藻 (一四一三)	萬葉集	小野妹子を遣隋 (二二六七) 大化改新 (一三〇五) 大津宮遷都 (一三二七)	隋	隋
四〇〇								
五〇〇	奈	大伴旅人 (一三九一)		續日本後紀 (二五〇一)	懷風藻 (一四一三)	三國	漢後	漢後
六〇〇								
七〇〇	良	山上憶良 (一三九三)		續日本後紀 (二五〇一)	懷風藻 (一四一三)	小野妹子を遣隋 (二二六七) 大化改新 (一三〇五) 大津宮遷都 (一三二七)	漢前	漢前
八〇〇								
九〇〇	朝	橋部赤人 (一三九五頃)		續日本後紀 (二五〇一)	懷風藻 (一四一三)	小野妹子を遣隋 (二二六七) 大化改新 (一三〇五) 大津宮遷都 (一三二七)	秦	秦
一〇〇〇								
一四〇〇	中	安倍仲麻呂 (一四三〇)		續日本後紀 (二五〇一)	懷風藻 (一四一三)	小野妹子を遣隋 (二二六七) 大化改新 (一三〇五) 大津宮遷都 (一三二七)	唐	唐
一四五〇								
一五〇〇	空	空海 (一四三三—一四九五)		續日本後紀 (二五〇一)	懷風藻 (一四一三)	小野妹子を遣隋 (二二六七) 大化改新 (一三〇五) 大津宮遷都 (一三二七)	唐	唐
一五〇〇								
一六〇〇	菅	菅原道真 (一五〇二—一五六三)		續日本後紀 (二五〇一)	懷風藻 (一四一三)	小野妹子を遣隋 (二二六七) 大化改新 (一三〇五) 大津宮遷都 (一三二七)	唐	唐
一六〇〇								
一七〇〇	源	源隆國 (二六六四—一七三七)		續日本後紀 (二五〇一)	懷風藻 (一四一三)	小野妹子を遣隋 (二二六七) 大化改新 (一三〇五) 大津宮遷都 (一三二七)	唐	唐
一七〇〇								
一八〇〇	赤	赤染衛門 (一六二七—一七〇一)		續日本後紀 (二五〇一)	懷風藻 (一四一三)	小野妹子を遣隋 (二二六七) 大化改新 (一三〇五) 大津宮遷都 (一三二七)	唐	唐
一八〇〇								
一八四五	源	源孝標の女 (一八四五—)		續日本後紀 (二五〇一)	懷風藻 (一四一三)	小野妹子を遣隋 (二二六七) 大化改新 (一三〇五) 大津宮遷都 (一三二七)	唐	唐
一八四五								
一九〇〇	近	西行法師 (一七七八—一八五〇)		續日本後紀 (二五〇一)	懷風藻 (一四一三)	小野妹子を遣隋 (二二六七) 大化改新 (一三〇五) 大津宮遷都 (一三二七)	唐	唐
一九〇〇								

南 宋 北 代 五 唐

一九〇〇

藤原家隆 (二八一八—一八九七)  
藤原定家 (二八二二—一九〇一)

承久の亂 (一八八〇)

宋

一九九四  
二〇〇〇

代 時 倉

阿佛尼 (一九四三)  
橋成父子

金枕集 (一八七二)  
方丈記 (一八七二)  
宇治拾遺物語  
海道紀行  
東關紀行  
平家物語  
源平盛衰記  
保元物語  
平治物語  
十訓抄 (一九二二)  
古今著聞集 (一九一四)  
十六夜日記 (一九三七)

弘安の役 (一九四一)  
建武中興 (一九九四)

元

二〇〇〇

兼北畠親房 (一九四三—二〇一〇)  
頼阿 (一九六三—二〇三二)  
觀阿彌 (一九九三—二〇四四)  
宗良親王 (一九七三—二〇四五)

世阿彌 (二一〇三)

神皇正統記 (二〇〇三)  
徒然草 (二〇一六)  
筑波集 (二〇一六)  
吉野拾遺鏡  
増鏡  
新葉集 (二〇四一)  
義經記  
會我物語  
太平記  
狂言曲  
お伽雙紙  
新苑玖波集 (二一五五)  
犬苑玖波集 (二一七四)

後龜山天皇神器を後小松天皇に傳ふ (二〇五二)

明

二二六三  
二二〇〇

古

代 時 町 室

宗祇 (二〇八一—二一六二)  
荒田木守武 (二一三三—二二〇九)  
山崎宗鑑 (二一二五—二二二二)

葡萄牙人來る (二二〇三)  
朝鮮征伐  
關ヶ原戰 (二二六〇)

家康江戸幕府を開く (二二六三)  
鎖國 (二二九九)

明

二二五〇

近

藤原惺窩 (二二二一—二二七九)  
中江藤樹 (二二六八—二三〇八)  
松永貞徳 (二二三一—二三一三)  
林羅山 (二二四二—二三一七)

假名雙紙  
萬葉集代匠記 (二三三六)  
浮世草紙  
奥の細道 (二三四九)  
芭蕉七部集  
曾根崎心中 (二三六三)  
國姓爺合戦 (二三七五)

赤穂義士復讐 (二三六二)  
吉宗入りて八代將軍となる (二三七六)

二二五〇

西山宗因 (二二六五—二三四二)  
井原西鶴 (二三〇二—二三五三)  
松尾芭蕉 (二三〇六—二三五四)  
契沖 (二三〇〇—二三六一)  
榎本其角 (二三一一—二三六七)  
貝原益軒 (二二八九—二三七三)  
近松門左衛門 (二三一一—二三八四)

八文字屋本  
雨月物語 (二四三五)  
蕪村句集 (二四四三)  
酒落本  
柳榎  
古事記傳 (二四五八)  
黃表紙  
東海道中膝栗毛 (二四六二)  
椿説弓張月 (二四六六)  
浮世風呂 (二四六九)

松平定信老中となる (二四四七)

二四〇〇

世

荷田春滿 (二三二八—二三九六)  
竹田出雲 (二三五三—二四一六)  
賀茂真淵 (二三五七—二四二九)  
田安宗武 (二三七五—二四三一)  
谷口蕪村 (二三五六—二四四三)  
横井也有 (二三六二—二四四三)  
柄井川柳 (二三七八—二四五〇)  
小澤蘆庵 (二三八三—二四六一)  
本居宣長 (二三九〇—二四六八)  
上田秋成 (二三九二—二四六九)  
山東京傳 (二四二一—二四七六)  
式亭三馬 (二四三六—二四八二)  
太田南畝 (二四〇九—二四八三)  
小林一茶 (二四二三—二四八八)  
十返舎一九 (二四三五—二四九一)  
香川景樹 (二四二八—二五〇三)  
瀧澤馬琴 (二四二七—二五〇八)

里見八犬傳 (二四七五—二五〇二)

清

二五〇〇

代 近

里見八犬傳 (二四七五—二五〇二)

米船浦賀に來る (二五一三)

王政復古 (二五二七)  
東京遷都 (二五二八)

二五五〇

代 近

王政復古 (二五二七)  
東京遷都 (二五二八)

王政復古 (二五二七)  
東京遷都 (二五二八)

王政復古 (二五二七)  
東京遷都 (二五二八)

文學年表 (二)

紀元	時代	年號	事	項
二五二八	近	明治元	太政官日記・江湖新聞等諸新聞出る。橘曙覧、大隈言道死す。府縣に小學校を設ける。「世界國畫」出る。	東京遷都。 版籍奉還。
二五三〇		二	「西洋道中膝栗毛」「西國立志編」出る。	廢藩置縣。 征韓論起る。
		三	「胡瓜圖解」出る。中村正直同人社を起す。	
		四	「文字の教」出る。八田知紀死す。	
		五	新島襄同志社をおこす。蓮月尼死す。	西南の役。
		六		
		七		
		八		
		九		
		一〇		
二五四〇		一一	教育令公布、「大阪朝日新聞」發刊。	
		一二	「新體詩抄」出る。	
		一三	「經國美談」出る。	
		一四		
		一五		
		一六		
		一七		
		一八	「小説神髓」「當世書生氣質」「佳人の奇遇」出る。紅葉等硯友社を結ぶ。	天津條約。
		一九	「雪中梅」出る。	
		二〇	「花間鶯」「浮雲」上巻、出る。	
二五五〇		二一	「浮雲」第二編出る。「東京朝日新聞」「大阪毎日新聞」發刊。	憲法發布。 帝國議會召集される。
		二二	「露團々」出る。「しがらみ草紙」創刊。	
		二三	教育勅語發布。新島襄死す。	
		二四	中村正直死す。「早稻田文學」創刊。	
		二五	五重塔出る。	
		二六	「文學界」發刊。	
		二七	「桐一葉」出る。北村透谷、假名垣魯文死す。	日清開戦。
		二八	「黑蜥蜴」「外科室」「濁江」「たけくらべ」出る。	

二五四〇	二五五〇	二五六〇	二五七〇	二五八〇	二五九〇
近				代	
一〇九八	一一一二	一二一四	一三二〇	一四二二	一五二四
<p>新島襄同志社をおこす。蓮月尼死す。</p>	<p>教育令公布、「大阪朝日新聞」發刊。 「新體詩抄」出る。 「經國美談」出る。 「小説神髓」「當世書生氣質」「佳人の奇遇」出る。紅葉等硯友社を結ぶ。 「雪中梅」出る。 「花間鶯」「浮雲」上巻、出る。</p>	<p>「浮雲」第二編出る。「東京朝日新聞」「大阪毎日新聞」發刊。 「露團々」出る。「しがらみ草紙」創刊。 教育勅語發布。新島襄死す。 中村正直死す。「早稲田文學」創刊。 五重塔出る。 「文學界」發刊。 「桐一葉」出る。北村透谷、假名垣魯文死す。 「黒蜥蜴」「外科室」「濁江」「たけくらべ」出る。 「多情多恨」出る。樋口一葉死す。 「金色夜叉」を書き初む。「若菜集」出る。</p>	<p>「一葉舟」「夏草」出る。雜誌「ホト、ギス」發刊 「不如歸」「天地有情」出る。 「高野聖」出る。「明星」發刊。 福澤諭吉死す。「武藏野」「思出の記」「落梅集」「みだれ髪」出る。 正岡子規、高山樗牛死す。「即興詩人」出る。 「獨絃哀歌」出る。尾崎紅葉、落合直文死す。 小泉八雲死す。 「我輩は猫である」「春鳥集」「海潮音」出る。 「破戒」「白羊宮」「東海遊子吟」「草枕」出る。 「虞美人草」「蒲團」「平凡」出る。</p>	<p>「春」出る。アラ、ギ創刊。川上眉山、國木田獨歩死す。 「新傾向句論」「口語詩論」出る。二葉亭四迷死す。 「土」「一握の砂」出る。「白樺」發刊。</p>	<p>「世間知らず」出る。石川啄木死す。 長塚節死す。 「明暗」出る。上田敏、夏目漱石死す。 「新生」「高瀬舟」出る。 「改造」發刊。</p>
西南の役。	天津條約。	<p>憲法發布。 帝國議會召集される。 日清開戦。</p>	<p>北清事變。 日英同盟。 日露開戦。 奉天大戰、日本海大海戦。</p>	<p>韓國併合。 清國亡び中華民國となる。 世界大戰始まる。</p>	<p>關東大震災。 世界大戰終る。 講和會議開かる。</p>
					<p>昭和 元 二 三 四 五 六 七</p>
代	現	現	現	現	現
昭	和	元	元	元	元
七	六	五	四	三	二
六	五	四	三	二	一
五	四	三	二	一	〇
四	三	二	一	〇	〇
三	二	一	〇	〇	〇
二	一	〇	〇	〇	〇
一	〇	〇	〇	〇	〇
〇	〇	〇	〇	〇	〇
〇	〇	〇	〇	〇	〇

昭和八年三月二十日

# 文部省檢定濟

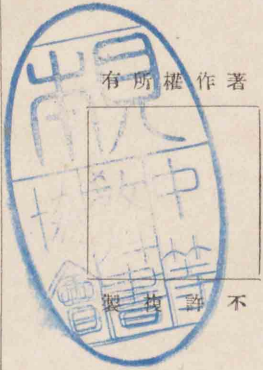
師範學校國語漢文教科用

中學國語漢文教科用

發行所

京都市九太町堀川西入  
電話西陣三三三・四八三・六九番  
振替口座大阪四九四九一番

星野書店



印發  
刷行  
者兼

星野敬一

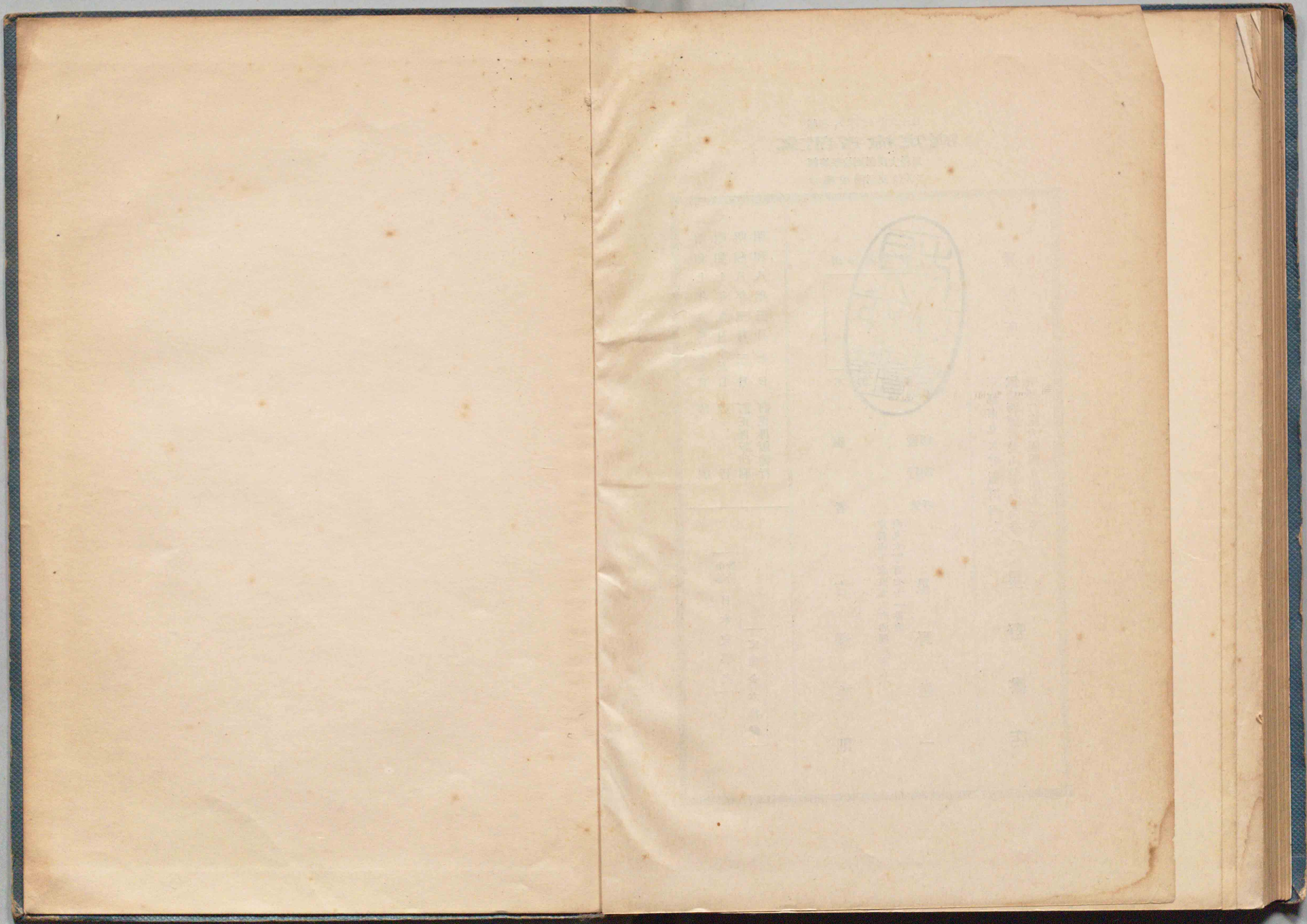
編者  
吉澤義則

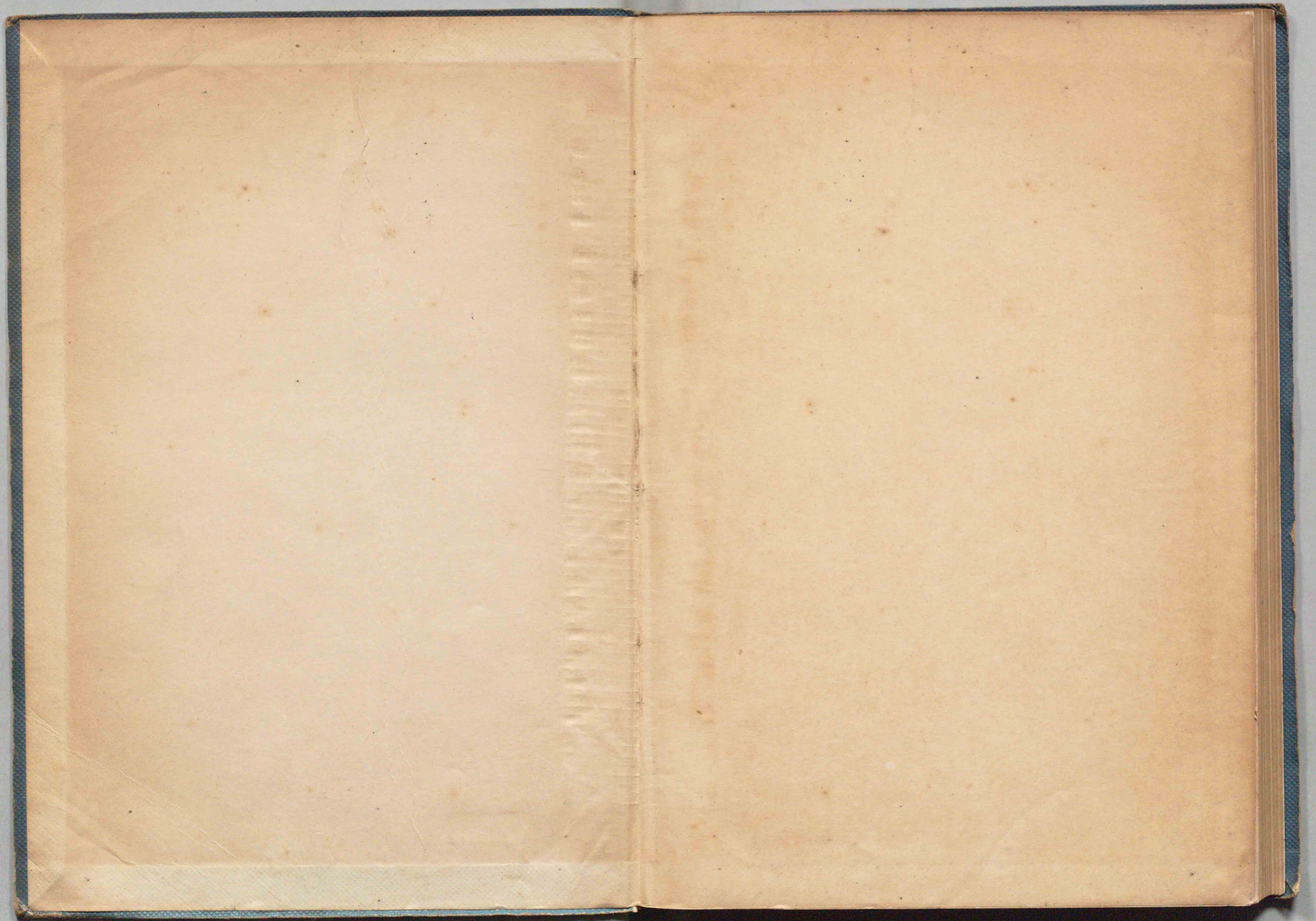
京都市上京區九太町通堀川西入  
西九太町百七十一番地

昭和七年九月十日 印刷  
昭和七年九月十五日 發行  
昭和八年三月三日 訂正再版印刷  
昭和八年三月七日 訂正再版發行

中等  
教科  
日本文學史

定價金六拾錢





広島大学図書

2000040723



庫  
3  
23